

21世紀の幕開け 星野道夫の精神を見つめ直す

～山梨県立科学館における星野道夫を軸とした一連の企画についての“極私的”報告書～

山梨県立科学館 天文学芸員

高橋真理子

Contents

| | |
|----|----------------------------------|
| | I はじめに～自分史にかえて～ |
| 1 | |
| | II 企画概要 |
| 5 | |
| | III プラネタリウム番組「オーロラストーリー」 |
| | III-1 経緯 |
| 6 | |
| | III-2 内容(シナリオ) |
| 7 | |
| | III-3 クレジット |
| 14 | |
| | III-4 番組仕様 |
| 16 | |
| | III-5 来館者の反応 |
| 16 | |
| | IV プラネタリウム共同企画「アラスカから次世代へのメッセージ」 |
| | IV-1 経緯にかえて(Aurora Times に寄せた記事) |
| 22 | |
| | IV-2 内容 |
| 23 | |

| | |
|----|-----------------------|
| | IV—3 来館者の反応 |
| 24 | |
| | V 星野道夫写真展～悠久なる時の流れ～ |
| | V—1 経緯にかえて(写真展のあいさつ文) |
| 26 | |
| | V—2 内容 |
| 27 | |
| | 見取り図、展示写真一覧、展示風景 |
| | V—3 来館者の反応 |
| 32 | |
| | VI ガイアシンフォニー第3番 |
| | VI—1 経緯 |
| 40 | |
| | VI—2 実施状況 |
| 40 | |
| | VII 一連企画に関する報道 |
| 41 | |
| | VIII おわりに～未来に向けて～ |
| 45 | |
| | I はじめに～自分史にかえて～ |

アラスカに初めて行ったのは今から11年前。その年は、太陽が最も活発になる活動極大期。それからちょうど1solar-cycleがめぐってきた。つまり、今年も極大期。その間、今年の3月も含めて4回アラスカに行った。今思い返すとそれが、すべて私の人生のある節目に当たっていることに気づく。「夢」「絶頂」「絶望」「結実」・・・それぞれのアラスカ行きが、これまでの人生の章を象徴しているかのよう。

「夢」

すべての始まりは、高校3年生のときに見た記事。写真家の星野道夫氏とオーロラ研究者の赤祖父俊一氏が対談し、オーロラの写真があり、オーロラやアラスカの自然について二人がたき火の前で語っている、そういうものだった。当時私はなんとなく北に

憧れがあり、大学は北海道と決めかけているときであり、「ヘーオーロラかあ、アラスカかあ、いいなあ」と何の理由もなく体がそう感じた。赤祖父先生の肩書きがアラスカ大学地球物理研究所の所長というのをみて、地球物理学科に行けばオーロラが研究できるのだろう、と勝手に判断し、北大に地球物理学科があるのを見て、これだ、と心に決めた。そのころは、部活(ボート部)三昧の生活だったが、9月の国体を終えたあとは、北海道のことばかりを考える生活。模試でどんなに悪い判定が出ようとも見向きもなかった。北海道が呼んでいる、何故かそう思っていた。

そんなわけで北大に入った。「3年間で北海道一周」のフレーズにひかれ、サイクリングクラブに入り、週末、夏休み、秋休み、春休み、ずっと自転車の生活をした。初夏の爆発的な芽吹き、真夏の青い空、無限の色をかもし出す鮮やかな紅葉、北大の真黄色に染まる銀杏並木、すべてを覆いつくす銀世界、その雪世界の美しさ、雪の森の静寂・・・「自然」に心を奪われる日々だった。

大学に入り間もないころ、母が星野道夫氏の初めての写真エッセイ「アラスカ～光と風～」を贈ってくれた。彼のアラスカへのまなざし、夢への熱い思い、強くて脆い自然に対する愛おしさ、彼がはじめてアラスカを踏んだのが19歳、それを讀んだ私は18歳・・・一気に読み終えたその日から、私は寝てもさめてもアラスカを思い、アラスカ！と心でつぶやくだけで震える、そんな状態になった。星野さんに手紙を書く。遠いアラスカの小さなエスキモーの村の村長に突然、手紙を出す人である。さすがに私が手紙を書いたところで怒らないだろう、と思っていた。何を書いたかは忘れてしまった。けれども、アラスカに行きたいのだけど、どうしたらよいか、ということは書いていたはずだ・・・完全に自分と星野さんを重ねていたから。数ヶ月後、「ぼくの親友が北大にいるから・・・」と友人を紹介する返事が届く。そこから、アラスカ行きへのエンジンが全開。その友人、児玉裕二さんからフェアバンクスに住む西山周子さんを紹介してもらう。赤祖父先生にも手紙を書く。日本でのオーロラの研究者に会う。北大の教授に、アラスカ大学の教授を紹介してもらう。少しずつ、自分がアラスカに近づいていく実感を味わった。夢に向かって階段を登っている・・・

そうして、20歳なりたての私は熱い思いでアラスカへ行った。1990年3月。西山さんのお宅に滞在。その家に、毎日のように星野さんは、御飯を食べたり、お風呂に入りに来てくれる。「今の年齢のころ、漠然といいな、と思っていることは大切にしたい方がいいよ。」「ぼくは、みんなが就職するときに会社を選ぶのと同じようにアラスカを選んだのだと思う。」ふとしたときに、星野さんの口からこんな言葉が出てくる。これから出す予定の写真集の写真の説明も一つ一つ丁寧にしてくれた。私は車を運転できないので、折をみては、大学やスーパーなどに連れていってくれた。ギターも聞かせてくれた。建設中だった彼の家も見せてもらった。南側に広い窓があって、光がたっぷり入る。まだたくさん雪が残り、空気はきりりとしている、けれども、陽射しはすっかり春めいている3月の、どこまでも穏やかな日々。アラスカ大学地球物理研究所の屋上に登り、広い広いアラスカの大地の広がりをつつと眺めながら、「大きな風景だねえ」と彼はつぶやく。ああ、ほんとうだ、なんて大きな風景。焦がれ続けたアラスカが目の前にある・・・その屋上で、氷がはっていてそれで滑ってどしんとしりもちをついた私を見ながら笑って、「き

っと今日はオーロラが見られるよ。」と彼は言う。それまでの4日間、快晴であるにも関わらずオーロラを見ることができなかった。夜、ほとんど眠らず、1時間寝ると落ち込んでいる私を見て、ちょっとかわいそうになったのだろうか……しかしその通りになった。西山さんの家の外で、なんとなくぼんやりした光が見えてくる。家にかげもどり、「ねえねえ！出てきたみたい！」と寝ている星野さんを揺り起こす。車に乗り込み、彼のお気に入り撮影場所まで飛ばしていく。車の中からも、どんどん強くなっていくのがわかる。降りたときには、もう光の乱舞。空のどこを見てよいのかわからぬほどに、光が動く。すごい、これはすごい！何かに向かって祈り、そしてお礼を言いたくなる。帰りの車の中で、「今日のはほんとうにすごかったねえ。こんなすごいのは今年一番かもしれないよ。」と星野さんは言う。私がオーロラを見られたことをわがことのように喜ぶ。そう、そんな感じだった。

滞在中、赤祖父先生にもお会いした。これも星野さんが繋いでくれた。「今、赤祖父先生に会うのと合わないのでは、君の人生が変わるかもしれないから。」とこのときばかりは強く。しかし、実際先生に会ってみても、先生の「オーロラ写真集」は一生懸命読んでいたが、いったい研究というものがどういうものなのかさえ全く分かっていなかった私。「で、オーロラの何をやりたいんだ？」と聞かれて、その「何」という意味さえよく分からず、先生の本の一番最後に数行書いてあったことを思い出し、「オーロラ発電所のこととか……」などと言って、先生を苦笑させた。たまらなく恥ずかしい思い出。大学院のことやインターンのことなどについても他の先生から教えてもらって帰る。「きっとまたおいで」と空港まで送ってくれた星野さん。「必ず！」ほんとうにそう思っていた。大学院でアラスカに再び来たい。何かを実現すれば、その次の壁がどんどん高くなっていく。けれども、その次なる大きな夢を持つこと、そのこと自体が幸せだった。

「絶頂」

2回目のアラスカはそれから4年後。1994年3月。私は、北大を卒業し、本格的にオーロラの研究をするため名古屋大学の大学院生をしていた。アラスカ大学大学院の夢は、いろいろあって少し先延ばし。大学4年の時には、それについてかなり悩んだ。研究をやることとアラスカに住むことのあまりのギャップに気づき、本当にやりたいことは何か、を考えた。ただただオーロラの研究をめざすには、大学の4年間で広がった興味の対象はあまりにたくさんあった。それをなんとか捨てずに全部抱えて生きる方法はないものか、と考え、夏のある日、「そうだミュージアムを創ればいいんだ」と思い立つ。思い立ってあまりに嬉しく、きっとこれは自分の大きな夢になりそうだ、と直感する。研究をすることと、ミュージアムを創ることもこれまた隔たっていることのようにも思ったが、まあとりあえず、目の前の目標に進んでみよう、と大学院に進学した。

修士の2年間は、新しく、楽しいことばかりの連続だった。ノルウェーで過ごした1ヶ月、オーロラの舞う下で、磁力計が揺れているのをみながら、自分がそのことを勉強している—そのシチュエーションに酔った。サンフランシスコでのアメリカ地球物理学会に出席し、研究者の世界の面白さを知った。コロラドのボウルダーで素晴らしい自然とともに3ヶ月間、研究をする機会を得た。なにもかもが楽しかった。研究はとりあえず、先生の

指導どおりにやっていたら、それでよかった。修論の学年での順位は一番だった。なぜなら、私の指導教官が、研究所の中で一番発言力のある人だったから・・・その修論の発表が終わってまもない3月に、オーロラサブストームの国際会議がフェアバンクスで開催された。それに出席するための、2度目のアラスカ。私は発表だけは得意だったので(内容はともかく)、ノルウェーでお世話になったブレッケ先生も、そして、赤祖父先生も私の発表をほめてくれた。その夜、オーロラは4年前よりもっと激しく乱舞した。

「絶望」

その2年半後。1996年。星野さんがカムチャッカでクマに襲われ死亡という衝撃的なニュース。そのころ、すでに博士課程の3年生になっていた私は、修士のころとはうって変わって、研究に魅力を感じられずいろんなことが滞っていた。ほんとうに面白いと思うテーマが見つからない。いや、面白いと思って少し手がけるが、すぐに方向性を失う。そんな感じだった。本当に自分は研究をしたいのだろうか、テーマにしていることがなかなか「自分の問題」にならない。研究だけではない。研究が滞るのに合わせて、指導教官との人間関係も悪化した。そしてプライベートな人間関係でも泥沼状態を経験していた。多くの親しかった人々を傷つけ、自分も傷つき、友人が死ぬか、私が死ぬか、という極限までいったことさえある。そんな状況の私を一時期救ったのは、「旅をする木」だった。最初に読んだのが、図書館の中だったのに、泣けて泣けてしかたがなかった。懐かしいアラスカの匂い。失いかけていた自分が蘇る。優しい人間になりたかった。人に力を与えられる人間になりたかった・・・私はどこへ行ってしまったのか。

そこに星野さんの訃報。それを知った夜から、毎日彼の本や写真集を眺めて何時間も過ごしているうちに、自分でもよくわからない悲しみと涙があふれてくる。思えば、彼は私にきっかけを与えてくれただけでなく、いったいどれだけ多くのことを与え、教えてくれたことだろう。彼の自然やすべての生命に対するいとおしい感情、わずかな可能性にかける情熱、果てしない夢、時間・空間軸の中での自然と人間の関わりへの問い、自分とそれらの関わりへの問い、人生の本質的な意味、いのちに対する誠実さ・・・彼との対話、彼が書いた文章、彼の写真はいつもそういうもので溢れていた。私は再びアラスカアラスカと言っていたころの自分を思い起こし、混乱を来した。私は何か、何だったのか、何をめざし、何をやりたいのかすっかりわからなくなってしまったのである。どうしようもなくなって、3回目のアラスカに赴いた。

真っ黄色に染まるアスペンの林がどこまでも美しい9月のフェアバンクス。星野さんのメモリアルは、彼が「旅をする木」の中に綴っている友人のパイロットのメモリアルを思い出させる、人々の深い思い、悲しみ、そしてミチオへの感謝がいっぱいに詰まった素晴らしい会。人間とはここまで深く、愛し愛され生きることができるのか・・・そのアラスカ滞在中、いったいアラスカが私にとって何だったのか、一生懸命考え、その答えとして「象徴」という言葉が思い浮かぶ。初めてのアラスカが私の一つの時代の始まりだったように、今回のアラスカがきっとその時代の終わりとか何かの始まりをつくってくれる、そんな気がした。星野さんへ手紙を書いた。これまでのこと、そしてこれから私が何を目指そうとするのか、について。星野さんが少し嘆くように、「テクノロジーは人間を宇宙まで

運ぶ時代をもたらし、自然科学は、私たちが誰であるかを確かに解き明かしつつある。それなのに何故か、私たちと世界のつながりを語ってはくれない」と書いていたことに對して、何か、科学とそれ以外のものを駆使して、それをつなぐことが、私の仕事になるのではないか……そう思った。

「結実」

その予感どおり、あのアラスカは次の時代の始まりだった。1997年。山梨に移り、新しい科学館の準備室で働くことになる。新しい場所、新しい環境、就職、ついでに(?)入籍。絶望の時代を闇に葬りさりたい衝動の結果だ。けれども必ずそれは自分の過去として一生くっついてくる。それを乗り越えるには、就職で決意したこと、再び自分で選び取った道を全うすること、それしか方法がないことはわかっていた。科学館では天文担当としてプラネタリウムに携わることとなった。プラネタリウムは、私が大学4年のときに漠然と考えたミュージアム—総合的で、科学も音楽も芸術も文学も全部ひっくるめられるところ—にかなり近いメディアであることに気づく。これはなかなかいいところに来たなあ、と思った。中心に宇宙がある、そうすれば、どんな分野ともつながっていく。そんなことにもようやく気づいた。ここで仕事ができることに、深く感謝した。

就職した年、「ガイアシンフォニー第3番」が完成した。龍村仁監督が制作した、星野道夫の魂を語りかける映画。最初は渋谷で一人で見た。どうしようもない衝撃。何故こんなに泣けるのか、その感情をどんなコトバを駆使してもまったく表現できない。身体中を轟轟と音になるばかり。いったい誰に伝えられるというのだろう、これを。どうにかしたい。でも、私にはそんなことを話せる相手が一人もいないではないか。どうしたらいい。悶え苦しむような衝撃。「感動」とかそういう言葉で片付けられない心の奥底からの叫び。涙にくれ、誰に書くでもない手紙を必死に書き続けた。しかし、言葉にならない。少しあとになって考えると、あれは、おまえはどう生きるのか、おまえの夢はどこへ行ったのか、とあまりに問い詰められたことによる苦しさだったのかもしれない。「アラスカ」がまた私を襲ってきた。どう生きるか、というのは、何をするか、というより、どのような人間として、という意味のほうが大きかっただろう。「ミチオの人生の目的は人の愛し方を学ぶことだった。そして彼は完全にそれを学びきった。…」メアリー・シールズのこの言葉が私には何よりも彼の本質を言い表していると思う。こんなミチオに影響を受けつつ、いったい私は何を学ぶことができたというのだろう。

その年の12月、甲府でも第3番の上映会が行われた。しかも、龍村仁監督の講演付き。たまたま連れていった知り合いが、会場でもたその知り合いに会い、どうやら講演会後に懇親会があるらしいことを知った。龍村氏と話がしたい、瞬間にそう思い、甲府盆地を一望する山の上のレストランに足を運んだ。広い窓には、夜景があふれ、その夜景のすぐ上に星が輝いている。なんという光景。参加者に埋もれながら話をしている龍村氏が、少し一人になった瞬間をつかまえて、話をした。ただ、私はあの映画をみたときの自分の状態を、体中を轟轟と鳴り響いたあの音のことを伝えたかっただけだ。……そして、龍村氏は瞬時にそれを理解した。わかってくれたことが私にもよくわかった。すると、龍村氏は「君は大丈夫だ」と言う。まるで天から光が降ってきた瞬間。「そ

うだ、大丈夫なんだ。自分の感性を信じていればそれでいいのだ。」しかし、私を襲う「アラスカ」と自分の仕事が結びつくとは、その時点では考えられなかった。ただ、自分の感性を信じよう、そう思った。それまで星が出ていたのに、初雪がちらつき始めていた。

3回目のアラスカからさらに4年半後、2001年。再びアラスカに行くチャンスを与えられた。オーロラツアーに講師として同行というなんとも申し訳ない、ありがたく、そしてお恥ずかしい話であったが、でも誘惑に負けたというのが正直なところ。1歳の息子を夫、夫の両親、私の両親に順番に押し付け旅立った。気さくで楽しい人々と過ごし、オーロラを待った。雪の上に寝ころんで自分の視界を空のみにするあの快感。アラスカの大地と自分の体の境目がわからなくなるくらいの快感。それにしてもオーロラは気まぐれだ。4晩、10時から明け方4時頃まで待って、トータル見られた時間は15分ほどか。それでも、全天にかかるオーロラが出現し、ほっと胸をなでおろす。シアトルからの帰りの飛行機での座席がちょうど窓側で、カナダ、アラスカ山脈、マッキンレー、カムチャッカ半島、オホーツク海、北海道—モンゴロイドが歩いてきた道—雪と氷に閉ざされたそれはそれは壮大な風景を見た。まさしくこの世とも思えない美しさ。「ああ、地球だ！」と感じる。もし全人類がその風景を心の中に常に共有して持てるのだったら、きっと今の地球は違うものになっているだろう。そうだ、「地球を外から見る視点」これだ。私のシーズンを象徴してきたアラスカ。今回のアラスカもまた、私の次の時代への始まりを促してくれた、そんな気がした。

飛行機で予感したことは、やはりまた当たった。それからたった9ヶ月の間に、これまでの10数年間が「結実」する経験ができた。まぎれもなく、人との出会いがそうさせた。星野道夫は、こうやって人を繋ぎ、人と自然を繋ぎながら、まだ生きている。ほんとうにそれを実感する。この「結実」を何かの形で残しておきたい、そう思い、この報告書をつくった。「極私的な企画報告書」。一連の企画のほとんどは、山梨県立科学館の予算に基づいており、私の「公」の仕事であるが、それとは別のところでこの文章を残しておきたいと思った。

21世紀の始まりが、あのアメリカで起きた同時多発テロだった、そういう人がたくさんいる。この1年を決して幸福な年と思わない人が多くいる。しかし、だからこそ、星野道夫の精神をこの世紀の始まりに見つめ直したい。きっと、人々が捜し求めている光が何かそこにあるはずだから……。

これに関わってくださったすべての方への感謝を込めて。

II 企画概要

・プラネタリウム番組「オーロラストーリー」

期間： 2001年9月29日～2002年1月6日

場所： 山梨県立科学館 スペースシアター

制作・著作： 山梨県立科学館・五藤光学研究所

「人は物語る。生と死について。地球と宇宙について。」

人は物語る。生と死を結び、地球と宇宙を結ぶオーロラについて。」

オーロラの魅力、サイエンスと神話の共通性、そして星野道夫の精神を盛り込んだストーリーです。リアリティーのあるアラスカの風景、人工衛星、地上観測によるオーロラの動画、アラスカ先住民のオーロラ神話、オーロラの絵画、クライマックスの全天を覆うオーロラ映像・・・そして満天の星空の中での星野道夫の語り。ドーム空間でさまざまに演出されます。

・プラネタリウム共同企画「アラスカから次世代へのメッセージ」

期日： 2001年10月20日(土)16:00～19:00

場所： 山梨県立科学館 多目的ホール&スペースシアター

講師： 赤祖父俊一氏(アラスカ大学北極圏研究センター所長)

内容： 赤祖父先生講演会「北極圏から地球を思う」

プラネタリウム投影「オーロラストーリー」

スライドショー「ナヌークの贈りもの」

主催：山梨県立科学館 共催：オーロラクラブ 後援：山梨大学

アラスカを含む地球の極地方は、地球上で起きている気候の変化がもっとも顕著に現れる場所であり、また地球上でもっとも美しい自然現象オーロラを見せてくれる場所です。アラスカにおける自然現象を真摯に見つめ続けているオーロラ研究の第一人者、赤祖父先生のメッセージ、さらには、雄大なアラスカの自然が語りかけてくるメッセージに耳を傾け、来る地球の未来について一緒に語りましょう。

・星野道夫写真展～悠久なる時の流れ～

期間： 2001年11月3日～12月16日

場所： 山梨県立科学館 メインエントランス

主催： 山梨県立科学館 協力： 星野道夫事務所

遠い自然を思い起こし、悠久なる時間を想像すること。その大切さを星野道夫はその美しい写真と文章で教えてくれました。21世紀に生きる私たちに残された課題は数多くありますが、こんなことが一つ言えるでしょう。自分の境界を自分の肌と決めてしまうのではなく、地球という大きな生命にまでどこまで近づけることができるか、どこまで自分と思えるだろうか、そして、それを大切に思えるだろうか。そういったことを、本写真展で星野道夫で感じとっていただければ、と思います。

・ガイアシンフォニー第3番

期日： 2001年12月7日(金)18:00～21:00

場所： 甲府市総合市民会館

主催： YBSトラベル

Ⅲ プラネタリウム番組「オーロラストーリー」

Ⅲ-1 経緯

開館して間もなくのころだったと思う。つまり、およそ3年前。プラネタリウムの新番組として、「星野道夫物語」なるものの企画書を提出した。幹部との企画会議で、「星野道夫って有名なの？」「山梨となんの関係があるんだ？」との話になり、館長からは「それだけ思い入れがあるのだったら、数年腰だめをかける」とやんわり？却下された。しかし、そのときはこの企画はもうこれで終わりだろう、と思っていた。そんなころ、ベネッセスタードームの衛藤氏と話をしていたときに何故か星野道夫の話になり、あちらでも企画している人がいるという。それが宮部勝之氏であった。それから連絡をとりあい、お互い企画をしている企画書を交換し、特に実現するでもなしに、そういう人がいるのだなあ、と認識しあった。

この企画はほとんど忘れ去られていたが、私の専門ということもあり、「オーロラ」の番組を制作することは担当内外の了解があった。当初、2001年1月からの冬番組の予定であったが、そのとき幹部の意向で何故かその冬番組はあるプロダクションの番組を購入することになり、オーロラは2001年9月末からの秋番組に押しやられることになった。しかし、これはあとから考えれば幸運なことでもあったのだ。2000年の秋には、その番組の代わりということで、トークショースペシャル「オーロラの夕べ」を企画でき、写真家坂本昇久氏のスライドショーも実現した。さらに幸運というのは、番組に使った大型映像のオーロラの映像だ。シネセルの荒木氏は2001年の3月も含めて、足掛け11年でオーロラを撮影しており、そのフィルムは2001年7月開館の日本科学未来館に収めることになっていた。結局、番組のオープニングもクライマックスもその映像で飾ることになり、もしこれが2001年1月の番組であったら、そのフィルムはかからなかっただろう。

「オーロラ」番組の企画としては、数年前からいくつかのシノプシスを書いていた。どの話も何かしら、星野道夫からの発想が多かったのは事実だが、しかし彼を主人公とするような話はとりあえず考えていなかった。話の内容は5つぐらい考えただろうか。

2000年暮れ、あるインターネットのサイトに出会った。「星野道夫に地球の自転軸を傾ける」なんというタイトル！びっくりしたが、なぜか最初は熱心には見なかった。そのあと1ヶ月ぐらいたってから、2001年元旦に池澤夏樹がナビゲーターをするラジオ番組「旅をした人」がオンエアされていたことをそのBBSから知る。そしてどうやらそれを録音していた人がいたらしい。これは聞きたい、とその録音した人にメールを書いた。それが西浦多樹さんだった。彼女の返事は非常に詩的で、「雪」に対する同じ感性を

持つことをすぐに感じた。その後すぐに会う機会があり、彼女に出会ってから私もBBSに書き込みをするようになる。そうこうするうちに、そのサイトを主催している鳥海なおみさんともメールをかわすようになり、その世界にどんどんひきこまれるようになった。星野道夫に共感する人がこんなについて、明るい世界をわかちあっている。とんでもなく素晴らしい世界であった。

一方、当館ではプラネタリウムの共同企画として、ミニ企画展を今年に入ってからおこなうようになっていた。その件で、何故か館長のほうから、「あの星野道夫の写真っていいのはどうなんだ」との話。私はそれにすぐに飛びつき、秋の番組に合わせるべく段取りをとった。2001年4月ごろ。まだいくつも案のあった番組のシノプシスをもう一度書き直し、星野道夫に焦点をあてた。鳥海さんのサイトに励まされたのと、写真展の開催が実現可能にむけて動き出していたこと。これらが重なり、「オーロラストーリー」は歩き始めた。

番組の制作を進めていくのに、「いつかは一緒に仕事がしたい」と思っていた宮部氏に演出をお願いすることになった。非常に心強く、そして優秀なサポート者に恵まれたことになる。番組を構成していく細かい過程はここには記さない。その代わりに、できあがったシナリオを次節に掲載する。この番組を通して伝えたかったことは3つ。「オーロラの魅力」「星野道夫の世界観」「科学と神話が目指しているものの共通性」。できあがったその日は、嬉しくて興奮して眠れなかった。人がどう見るかはとりあえず置いて。

Ⅲ-2 内容(シナリオ)

山梨県立科学館 プラネタリウム 2001 年秋番組 「オーロラストーリー」

声の出演:

星野道夫(以下 道): 遠藤守哉

科学者(以下 科): 水鳥鉄夫

インディアン(以下 老): 辻村真人

パイロット(以下 パ): 細井治

ナレーション(以下 ナ): 坪井章子

脚本: 高橋真理子

演出: 宮部勝之、高橋真理子、奥木晋

録音: ミキサー 波多野宏之

選曲 高橋真理子、宮部勝之、中西俊博

著作・制作：山梨県立科学館、五藤光学研究所

- M1 <フィリップ・ジオルダーノ「マリア、海辺にて」>

* 星空

「人が一生を閉じる瞬間、だれでもある一つの強烈な風景を思い出すとしたら、自分はアラスカで見続けたオーロラかもしれない。 星野道夫」(テロップ)

【場面1 アラスカルース氷河1】

アラスカ マッキンレー山南麓(テロップ)

2月5日(テロップ)

* 大型映像 ルース氷河空撮。

* セスナの音

道・・・あのあたりに着陸できるかな。

パ・・・OK。やってみよう。それにしても、こんな場所で1ヶ月間、一人でこもるなんて、どこまで本気なんだい？

道・・・どうしても、あのマッキンレーにかかるオーロラの写真がとりたいんだ。

パ・・・みんな君にさんざん言ったろうけど、あまり無理をしちゃいけないぜ。そりゃあ、マッキンレーはいつだって最高だけだね。

道・・・どうしてそこまでするのか、っていわれてもよくわからないんだ。オーロラがみせるあの不思議さ、宇宙とつながっているというあの感じを伝えるのに、この場所が一番いいような気がするんだ。

パ・・・はっは。君にはかなわないよ。じゃああそこにランディングだ。迎えにくるのは1ヵ月後だね。

* セスナ音 大きくなる

* マッキンレーを目の前にのぞむルース氷河の SL.

* ルース氷河に立つ、彼。

ナ・・・極北の地、アラスカ。世界最高峰のひとつ、マッキンレーを目の前に望む、ルース氷河。冬になれば、マイナス50度の雪と氷にとざされた世界。この場所で、彼はひたすらオーロラを待ち続ける。

*手にカメラをもつ。

道・・・アラスカにきてはじめてオーロラをみたとき、まったく声がでないほどその壮大さに圧倒された。それ以来もう何度も見上げてきたオーロラだけれど、いつしかマッキンレー山にかかるオーロラがどうしても撮りたいと思うようになった。

*オーロラの写真。ズームアップ。

ナ・・・オーロラ。人々を魅了してやまない、神秘の光。地球上でもっとも美しい自然現象の一つとさえ言われる。

*タイトル

【アラスカ大学地球物理学研究所1】

□M2

半月前(テロップ)

アラスカ大学地球物理研究所 (テロップ)

* 研究所概観

ナ・・・ルース氷河に足を踏み入れる半月前、彼はオーロラを研究をする科学者を訪ねていた。

* 窓辺で話をする二人

道・・・今度、マッキンレー山のふもとでキャンプをし、オーロラを待とうと思っています。2月から3月の間にかけてのオーロラの予報ってできるものなんですか。

科・・・オーロラの写真を撮るっていったね？

道・・・ええ。

* 解析図のモニターがならぶ研究室

科・・・そうか。結論から言ってしまうえば、いつどこで、オーロラが激しく舞うのか、それは今のところ科学者も予報はできない。けれども、オーロラがどうして光っているのか、その原因が何であるのか、というところはわかっている。大雑把にいうと、オーロラの原因は太陽さ。太陽から吹き出ている電気をもった細かい粒。それが、地球の大気にぶつかって光るのがオーロラだからね。しかも、今は太陽がとても活発な時期で、太陽からの粒子もたくさん出ているときなんだよ。

道・・・太陽の様子がわかれば、オーロラが激しくなるかどうかわかるわけですね？

科・・・うん。最近になって、人工衛星で細かい太陽のデータがとれるようになってきた。それを使って、オーロラの予測ができないかって、ちょうど研究しているところだよ。2日前ぐらいの太陽のデータで、オーロラの活動をどこまで予測できるか、ね。だから、私たちも観測体制を整えて、待っているところさ。

道・・・それでも1ヵ月後の様子を知るのはまだまだ難しいのですね。

科・・・でも27日周期で激しくなるオーロラっていうのもあってね。ある程度、今までのデータを見れば、この次激しくなるときっていうのは検討がつく。しかし、突発的なものについては、運としかいいようがない。

* 机の上にあるカメラ

道・・・運、ですか。

科・・・ところで、1ヶ月間もルース氷河にキャンプをするなんて、あまりに危険なのじゃないかい？

- M2終わり

* 窓辺で話をする二人

道・・・危険は覚悟です。どうして、って言われてもうまく説明できないんですけど・・・でも、もしほんとうにやりたいことがあって、少しでも可能性があるなら、力いっぱい突っ込んでみたいんです。もしだめだったら、それはそれできっと何か学ぶことがあるんじゃないか、と。

□M3

* ルース氷河。夕暮れから、夜。風の声。テントがばたばたする音。時間とともにテントにあまりがとれる。

* 星空

道・・・きーん、と凍てつく氷河の夜。まるで、星が落ちてくるかのようだ。

道・・・1ヶ月間、大自然との対話が始まる。オーロラの女神は僕に微笑んでくれるのだろうか。

【これまでのアラスカ回想】

アラスカを旅して（テロップ）

* シシュマレフ村の空撮写真

ナ・・・彼が最初にアラスカへ来たのは、8年前。1枚の写真がきっかけだった。広大なベーリング海の広がりの中で、ぼつんと浮かぶ島の、小さなエスキモーの村を映す、たった1枚の写真。

道・・・なぜこんな地の果てのような場所に人が暮らさなければならないのか。それは実に荒涼とした風景だった。いったいどんな人々が何を考えて生きているのだろう。ともかく行きたかった。自分がこれまで生きてきた世界の価値観、それを崩してくれる何かが見つけれられるのではないか。

□M4 フィリップ・ジョルダーノ「ロスト・ボーイズ・コーリング」

- アラスカの風景 SL

ナ・・・そうして、彼はアラスカへ来た。彼はただ、アラスカにひかれ、ただ夢中でアラスカの白地図をうめていくようにアラスカを歩き、そして写真をとった。

- ナレーションにあわせて、星野さんの写真。

道・・・さまざまな夢を描いてぼくはアラスカにきた。頭の中にたくさんの計画がぎっしりつまっていた。まるでそのひとつひとつを消化していくかのように、旅をしていった。アラスカ北極圏を横切るブルックス山脈の、未踏の山や谷を歩いた。グレイシャーベイをカヤックで旅しながら、氷河のきしむ音をきいた。エスキモーの人々とウミアックを漕ぎ、北極海にセミ鯨を追った。アサバスカンインディアンの村でポトラッチをみた。カリブ

一の季節移動にひかれ、その旅を追い続けた。グリズリーの1年の生活を記録した。数えきれないほどのオーロラをみあげた。オオカミにであった、さまざまな人の暮らしをした。いつの間にか長い年月が過ぎていた。

- ワタリガラスが飛んできて、木にとまる。
- SE: 羽ばたきの音

道…あれは、カラス？

ある人…ワタリガラスだよ。ワタリガラスは、アラスカの先住民の神話にたくさん登場する。彼らにとっては、ワタリガラスは、この世界の最初を作った神様なのさ。

* 大型映像 アラスカの風景空撮

道…鳥になったつもりで、アラスカを眺める。この広大な風景は、点のような人間の存在をいとおしくさせる。あの点、ひとつひとつと出会い、その人間を好きになったとき、風景ははじめて広がりと深さをもってくる。

【アラスカ大学地球物理学研究所2】

□M5

* 飛ぶワタリガラスが、人工衛星にオーバーラップしていく。

* 地球がでてきて、人工衛星が地球のまわりをまわる。

科…人間は空を飛ぶことを越えて、さらには地球を外から見ようになった。今から、50年前は、オーロラをつくりだす粒子がどうやってふってくるのかなんていうことはわからなかった。1960年代に人工衛星が登場して、地球の外からオーロラを観測できるようになって、飛躍的にいろいろなことがわかったんだよ。

アラスカ大学地球物理研究所(テロップ)

* 人工衛星ポーターの動画

科…ほら、これは、アメリカがうちあげた人工衛星ポーターがとったオーロラの写真。北極の上から眺めているものだ。オーロラは宇宙から見るとドーナツ型をしている。20年前は、こんな写真が撮れるだけでした。20年前は、こんなふうな、オーロラの動きが詳細にわかってきている。赤と白い部分が、強いオーロラの出ているところだ。今、1分間を1

秒ほどに短縮してみているが、激しく動くのがよくわかるだろう。この一連の激しいオーロラをサブストームと呼んでいる。サブストームはかなり狭い領域から始まる。このサブストームがおきているちょうど真下にいれば、素晴らしいオーロラが見られるというわけさ。

- 全天カメラの映像

科・・・このようなサブストームが起きているときに、地上からみるとこんな感じになる。宇宙時代に入って、飛躍的にいろんなことが分かってきたといったけれども、なぜこんなにはやく動くのか、なぜこんな渦をまくのか、いつどこでおきるのか、やっぱりまだまだわからない。それがいつかわかるようになるのか、ならないのかさえ、私たちにもわからないんだ。

【アラスカルス氷河2】

□M6

2月15日(テロップ)

道・・・オーロラサブストームはほんとうにおきるだろうか。

ナ・・・彼がオーロラを待ち続けて、もう10日がたっていた。オーロラは空が晴れていなければみえない。そして、晴れていても、出てくるとは限らない。

道・・・月がある程度明るくなければ、マッキンレーが浮かびあがらないことに気づく。半月、快晴、オーロラ、この三つが重なる日でなければ、僕が考えているような撮影はできない。

ナ・・・気温はマイナス50度をさらに下回る。

道・・・自分は何をしているのだろうか、とふと思う。そんなとき、じっと耳をすます。氷河、そして満天の星が、遠い遠い昔から続いている時間の流れを伝えてくる。遠い昔からこの氷河はオーロラの光を受けていたのだろうか。遠い遠い昔こんなふうにはオーロラを待っている生命はいたのだろうか。気の遠くなるような長い時間の中に、自分という存在がいることの不思議さがふつふつとわいてくる。

【これまでのアラスカ回想—インディアンの廃墟の森】

遠い記憶 ～インディアンの廃墟の森 (テロップ)

*ワタリガラスが飛ぶ

□M7

*インディアンの廃墟の森 SL

ナ・・・ある日、彼は森の中の村に向かっていた。昔々、人々が住んでいたであろう村。今ではすっかりコケむした森となり、昔の村は、ほとんど形跡を残さず、自然に帰っている。

道・・・深い森に入ると、そこに生きていた人々の息遣いが聞こえるような気がしてくる。何千年という昔、人々はどんな気持ちでオーロラを眺めていたのだろうか。

*村のある風景 SL オーバーラップ

□M8(オーバーラップ)

*小屋クローズアップ

*草をふむ足音。ドアが開く。

古・・・やあようこそ。お入りなさい。

道・・・ここは・・・？

*ともし火の道が近づく。

古・・・ようこそわれわれの村へ。

道・・・さっきまでここは廃墟だったんじゃ、、、

古・・・君はオーロラを待っているんだね？

道・・・どうしてそれを？

*ともし火の道の向こう側にたつ古老。その姿がみえてくる。

古・・・私たちの輪に入りなさい。私たちも待っている。オーロラが出てくるときに、今日の祭りが始まる。今日は、われわれの祭りのもっとも大事なポトラッチ。先祖の霊を送る重要な儀式だ。だから、よく聞くとよい。これはとても大事な話なのだから。

□M9

*ドームの上から光がもれ、それが穴のようにひろがっていく。

古・・・空は大地の上にアーチ状の固い建材でつくられた一大ドームをなしている。その中に一つの穴があいており、それを通して死霊たちは天国へ行く。ワタリガラスは死者をこの通路から導き、その足下を照らしてやるために、たいまつに火を点ずる。これがオーロラの光だ。

*光の帯

古・・・オーロラが出るときは、生きているものと死んだものたちが、出会えるときなのだ。

*光のうねり、ワタリガラス

古・・・ときどき、オーロラの発生とともに、ひゅーひゅーばりばりと聞こえる音は、天界の精霊たちが地上の人々に語りかけようとするときの声だ。それに応えるには、いつもささやくような低い声でないといけない。

*Hendrix の先住民とオーロラの絵

道・・・彼らは漠然とした、本能的な自然への恐れをもっているのだろう。日常生活での、ひとつひとつの小さな関わり。そこに説明のつかない自然との約束がある。それは僕たちがなくしてしまった、生き続けてゆくための、ひとつの力。生物としての緊張感といってもよいだろう。

ナ・・・彼らにとって、オーロラの光は、自然に対する恐れ、尊敬の気持ちを最も掻き立てるもの。その恐れとともに、天から降り注ぐ光は、大いなるものに包まれた安心感を彼らに与え続けてきたのだ。

【アラスカ大学地球物理学研究所3】

□M10

* 星空の中を人工衛星が飛ぶ。

アラスカ大学地球物理研究所(テロップ)

*ポニー衛星のオーロラオーバルの写真

科…さっきみせたオーロラのドーナツ型。なぜ、こんな形になるのかという話をしようか。オーロラを光らせる粒子のふるさと、太陽からたどってこよう。

*メカニズム説明 CG

科…太陽からはつねに、太陽風とよばれる電気を持った粒子が吹き出している。太陽の活動が特に活発になると、太陽風はより多く放出される。地球に到達するまで数日間の旅だ。太陽風が、そのまま地上に届いたら、そりゃ大変さ、生命は生きていけない。ところが、その粒子を入らせない、バリアを地球はもっているのさ。それが、地球の磁石だよ。磁石があるおかげで、粒子は地球に入ってこない。そのかわり、地球の磁石がつくりだす磁場の形を、こんなふうに、吹流しのようになってしまう。ずーっと太陽から離れたところにくると、バリアも弱くなってくところがある。ちょうど穴みたいなものだ。

*リバーブがかかった古老の声

*ドーム型遠景

古…空は大地の上にアーチ状の固い建材でつくられた一大ドームをなしている。その中に一つの穴があいており、それを通して死霊たちは天国へ行く。

*再び CG

科…穴ともいえる場所から入り込んできた粒子は、この赤い領域にたくさんある。いったん入り込むと、磁力線にそって、粒子が地球に注ぎ込む。その場所は、地球でいう極地方のあたりだけ、ということになる。それが、あんなドーナツ型をつくっているというわけだ。だから、オーロラが見える場所は、宇宙に向かって開いている唯一の場所といってもいいね。

*古老の声オーバーラップ

*天井の穴からふりそそぐオーロラカーテン

古…オーロラは、生きているものと死んだものがあるときにでてくるものなのだ。死者があの世界へわたっていく道を照らしているのがオーロラ…

音なし

ナ・・・宇宙への窓、死者があゝの世へわたっていく架け橋、… 地球と宇宙を結び、生と死を結んでいる。

【アラスカルース氷河3】

□M11 フィリッパ・ジョルダーノ「ディソナンツエ」

道・・・2月 18 日 雪。

2 月 21 日 快晴、しかし夜2時までまつがオーロラ出ず。

2 月 22 日 薄いオーロラが出るが山が浮かび上がらず。

* 星日周

* 半月

ナ・・・そして、半月が昇ってきた3月 2 日。

* 大型映像 オーロラサブストーム

* 「ディソナンツエ」山場

□M11 終わり

* シャッターの音と共に、マッキンレーにかかるオーロラの写真。

道・・・ふたつのことが重なった。人工衛星を飛ばして地球のしくみを理解しようとする試みも、インディアンのように、自らの存在の意味を問いつける物語も、それぞれが人間の作り出した神話のような気がしてならない。

【エンディング】

* マッキンレーにかかるオーロラ写真

道・・・マッキンレーにかかるオーロラ。その激しく踊る光の帯は、僕に何かを語りかけている・・・そんな気がした。それはいったいなんなのだろう・・・。

揺らめき続けるオーロラにかさなって、これまで出会ってきた人々の姿が浮かんできた。

□M12 フィリッパ・ジョルダーノ「マリア、海辺にて」

道・・・揺らめき続けるオーロラにかさなって、これまで出会ってきた人々の姿が浮かんできた。

* 全天スライドのコロナオーロラ

道・・・そのとき、オーロラはとても美しくやさしく降り注いだ。僕は、僕が求めていたものが何なのか、少しわかったような気がした。

* 星空のみ

道・・・僕は人間が究極的に知りたいことを考えた。一万年の星のきらめきが問いかけてくる宇宙の深さ、人間が遠い昔から祈り続けてきた彼岸という世界、どんな未来にむかい何の目的をおわされているのか、という人間の存在の意味。そのひとつひとつがどこかでつながっているような気がした。けれども、人間がもし本当に知りたいことを知ってしまったら、私達は生きてゆく力を得るのだろうか。それとも失ってゆくのだろうか。そのことを知ろうとする想いが人間を支えながら、それが知り得ないことで私達は生かされているのではないだろうか。

* 大型映像 マッキンレーにかかるオーロラ

* 昼間のルース氷河

* 遠くからセスナの音、セスナが近づいてくる。

道・・・遠くから聞こえてくるセスナの音。僕は思いっきりセスナに手を振った。そして、僕はカメラを片手に、これから出会っていく人々と世界のことを思った。マッキンレーの空は、ずっとずっと遠くまで青く澄んでいた。

* 頭上をセスナが通過する音。

* クレジット

III-3 クレジット

【音響】

・ナレーション

星野道夫：遠藤守哉

科学者：水鳥鉄夫

インディアンの長老：辻村真人

パイロット：細井治

ナレーター：坪井章子

・使用楽曲

フィリップ・ジョルダノ

・録音

(株)サウンドクラフト

ミキサー 波多野宏之

選曲効果 中西俊博

【映像】

・使用写真撮影

星野道夫 (14 枚)

赤坂友昭 (4 枚)

坂本昇久 (5 枚)

・大型映像

日本未来科学館

シネセル

・人工衛星ポララー映像(動画)

Dr. Louis Frank, Dr. John Sigwarth (University of Iowa)

・地上全天カメラ映像(動画)

国立極地研究所、東北大学

- ・人工衛星 SOHO 映像 (静止画)

NASA, ESA

- ・原画資料提供

University of Alaska、オーロラクラブ

- ・オーロラと先住民の絵画

Dianne Hendrix

- ・その他の作画

五藤光学研究所

【総合】

- ・特別協力 星野道夫事務所
 - ・脚本 高橋真理子 (山梨県立科学館)
 - ・演出 宮部勝之 (スペースサイト)、高橋真理子、奥木晋 (五藤光学研究所)
 - ・装填 奥木晋、梶元和之、鬼嶋清美 (五藤光学研究所)
 - ・制作・著作 山梨県立科学館 ・制作協力 スペースサイト

【参考文献】

- ・引用文献

星野道夫「アラスカ～光と風～」(福音館日曜文庫)

星野道夫「旅をする木」(文芸春秋)

星野道夫「アラスカ～風のような物語～」(小学館)

星野道夫「イニユニック～生命～」(新潮社)

星野道夫「森と氷河と鯨」(世界文化社)

星野道夫「海人(安里勇)ライナーノーツ」(リスペクトレコード)

・その他参考文献

赤祖父俊一「オーロラ写真集」(朝倉書店)

上出洋介「オーロラの神秘」(山と溪谷社)

Ⅲ—4 番組仕様

①時間 26分

②投影素材

・35mmスライド 93枚

・スカイライン用スライド 40枚(8シーン)

・ワイド(6x7)スライド 7枚(うち1枚は全天用)

・ビデオ(CRV)2枚(3シーン分)

人工衛星ポラーのオーロラ画像、地上からの全天オーロラ画像

オーロラの説明をするCG

・アストロビジョン 70mm10Pフィルム 4シーン

マッキンレー空撮、アラスカ大学空撮、オーロラ2

・音響テープ(DA98用 Hi8テープ)

・プラネタリウム本体プログラム

・補助投影機制御用プログラム

・音響演出用プログラム

3. 今回の番組に使用している機器

・プラネタリウム GSS—Helios(五藤光学製)

*この中に、惑星投影機、スカイラインも含まれる。

・アストロビジョン L2(五藤光学製)

- ・3 管式ビデオプロジェクター 3 台
- ・マルチスライドプロジェクター12 台
 - ・ワイドスライドプロジェクター2 台
 - ・XY ズームスライドプロジェクター 2台
 - ・ユニプロ 2台
 - ・補助投影機制御装置 DATATON TRAX Ver.3.7
- ・音響デッキ DA98
- ・音響演出用機器 PACS

Ⅲ—5 来館者の反応

以下、オーロラストーリーを観覧した人の感想を抜粋。

- ・「オーロラストーリー」はとても意欲的な作品ですね。ぜひ一人でも多くの子供達に見て欲しいと思います。
- ・サイエンスと神話とに同じだけの距離を持ってオーロラにアプローチされる番組のバランス感覚がホントに心地よかったです。
- ・「科学とは」ということを、とても根源的な「人とは」「命とは」という視点を見失うことなく物語っていると思った。表現するときが一番大切なことは「想い」だと思う。それが心の深みにまで届いてきた。
- ・すばらしい。人間とは何かを問いかける科学のロマンを感じた。
- ・全天にオーロラが写し出された時は感動しました。本物を見てみたいと改めて思いました。
- ・天蓋は固い殻でできている。地球磁気圏…両方の穴の共通点！「！」が多いストーリー。フィリップ・ジョルダノとシネセルの全周画像の共演…すごかったです。
- ・星野さん関係の作品はどうしても涙が出ます。やっぱり生きていて欲しかったと。このビデオぜひ欲しいんですけど
- ・MARIKO さんの解説、星のお話良かったです。やさしい語り心が心をホットさせてくれました。プラネタリウムの満天の星を見ていて、アラスカで見た信じられないほどの満天

の星空を思い出しました。オーロラストーリーはもう胸が熱くなり、こらえきれず何度も涙があふれてきました。星野さんの本を読んだり写真を見て、どんどん惹かれて行ったこの何年間いつも星野さん自身に会って話をしたかったと無理な思いを持ちつづけていましたが映像や音楽でのオーロラストーリーで話をすることが出来た気持ちになりました。(上手く言えませんが)素敵な企画を本当に有難うございました。素敵な企画を本当に有難うございました。そしてこんな素晴らしい作品を作ってくださいって有難うございました。

・久しぶりにプラネタリウムを観てジーンと来ました。お姉さんの話もステキでした。オーロラストーリーも疑似体験が出来たようで良かったです。いつかルース氷河でオーロラをみたいです。

・マッキンレーと道夫氏とても感動しました。プラネタリウムって工夫次第ですばらしい企画が出来ることが改めてわかりました

・日常生活では、絶対にみることが出来ない星空。大昔人間はこのような星空のもとで暮らしていたのかと思うと科学の進歩って何?と考えさせられました。それにしても、素晴らしいプラネタリウム。

・現代の発見した科学からのオーロラのしくみと昔からのアラスカに住む人たちのオーロラにまつわる神話がどこかでつながっているようでとても不思議に思いました。星野道夫さんが見たオーロラを私も見たいと思いました。

・お話(オーロラストーリー)がとても興味深かったです。科学の力を使ってもまだわからないことがあること、科学は、人間が作り出したお話と言う事を視野に入れながら、人間の価値、生まれることの意味を考えていきたいと思います。

・科学と神話の求めている部分と同じだという視点が斬新で面白かったです。

・やはり自然現象を扱うときは、女性的なタッチで作ると印象深いよい作品になりますね。高橋さんのお人柄がよく出てたと思います。いい勉強させていただきました。

・いままで、各館でいろいろ番組を見せていただき、一般的に女性が手がけた番組は(別に男女を差別するつもりはないのですが、毎回そのような印象を受けるので)、こじんまりとまとまってはいるが、スケール感とかダイナミックさに欠けるのがほとんどでしたが、オーロラストーリーについてはそれが感じられず、ダイナミックに仕上がっていました。

・オーロラストーリーを見ながら涙が出てきました。言葉にできないものがこみあげてきたのでした。

・プラネタリウムの可能、あの特殊にして稀有な空間の力を発揮する表現、科学、天文、宇宙、両腕からはみ出す遠い距離と時間、そして肌に触れた光景と、隣の手と眼と声

と。それらを目の前の白地図に在らしめ、一点に引き出すのはやはり、深いところに在る想いなんだということを知ることの大切さ、その貴重さ。

人の形をしていることすら時に辛くなることもある、きっと誰もそういう途方もない人間だから、大事な存在(たとえばそれは北海道のクマだったり物語の中のうさぎだったり、あるいはある日ある時を共有した誰かだったり...)に思いがけず出会ってしまった時、そして、その存在が確かに育っていくことを実感する時、どうしようもなくヒトであることが嬉しくなる。そして、あなたに会えたわたくしでよかったと。わたしがここにいてよかったと...「オーロラストーリー」の中で、時折ワタリガラスが出現し、その度に私は、初めて手にした星野道夫さんのエッセイ、『森と氷河とくじら』を読み終えた時の感覚がまざまざと蘇ってきました。ぞくぞくするようなボブとの出会い、遠い物語への出発の予感、長い長い旅の途上...ある種の恐れと真摯な気持ちを、どれだけ自分のいる場所で育てていけているだろうか？そんな気持ちと、空にかかる光をただ愛でる時のような気持ちをプラネタリウムに持ち込みつつ、「遠くを見たい」「この足である場所まで歩いていきたい」、そう思う力って、実はとても近い所から生れるんだということ、痛切に感じました。そして、真理子さんにとって、その想いの発祥の地が星野道夫という一人の人間だったのだと。そこから、まるで『星兎』のようにまっすぐにのびた光りが「オーロラストーリー」を投影している...その「今」という時空の愛しさ。生きててよかったって、なんだかふと思ってしまった...私、セスナから降りた時とセスナを待つ時の星野さん、好きなんです。

大地と空と一つの命と...なんかね、そのトライアングルが、とても好き。そして、ああ、私はやっぱり、ヒトが好きなんだなあって...そう思えることって、とっても大事だと思う。「オーロラストーリー」は私にとって、そんなことまで感じさせてくれる作品でした。

【鳥海さんのBBSより】

鳥海さんご自身のメッセージ

神田の古本屋でシュシュマレフの写真を観た星野道夫は、シュシュマレフの市長に手紙を出し、あきらめていた頃に返信が届いてアラスカへ発ちました。そして、アラスカの自然や人々に関わり続け、多くの写真と文章を著してくれました。ある雑誌の誌上で星野道夫によるオーロラの写真を観た MARIKO さんは、出版社を介して星野道夫に手紙を出し、半年後に返信が届いてアラスカへ発ちました。そして、オーロラの研究に関わり続け、山梨県立科学館で学芸員をされています。

13年間の時を隔てて、星野道夫と MARIKO さんのコラボレーションが始まろうとしています。下記に改めてご案内させていただきます。

「ぼくはよく編集者から思い入れが強すぎるって言われるんです。編集者からするとどうってことない写真でも、当事者の僕としてはどうしても入れたい場合がある。アラスカ、極北の動物やオーロラに対する自分なりの思い入れがあるから。それがないとひとつ

のことに長い間関わり続けられないと思うんですね。」

(MARIKO さんが高校生の頃に読んだ雑誌に掲載されている星野道夫の言葉)

アラスカやオーロラでなくてもいいのかもしれませんが、自分の心に触れたものを、自分の目で確かめ、自分の直観を信じて、自分の人生を傾けていくこと。星野道夫や MARIKO さんの、そんなスピリットこそに共感しています。MARIKO さん、この度のオープニング、おめでとうございます。そして、このような機会をありがとうございます。もし、星野道夫が『オーロラストーリー』を観たならば、数日間待つてようやくオーロラを初めて見ることできたあの時のように、MARIKO さんにこう語りかけるのでしょよね。「きれいだねえ。すごいねえ。こんな綺麗なオーロラが見られるなんて滅多にないんだよ。良かったねえ。」

・週末、紅葉残る山梨へ行ってきました。MARIKO さん、行く前から本当に色々お世話になりました。ありがとうございます。山梨県立科学館からの甲府盆地の眺めは不思議でゆるやかな気持ちになりますね。昨日は日曜日だったこともあるのか、子供たちの元気な声が響く中、ゆったり過ごすことができました。「オーロラストーリー」も写真展も素敵でした。(言葉足りずでごめんなさい)こんな所が身近にあって、ふと立ち寄りた時に立ち寄って時間を過ごす事ができたら、もっと豊かになれるのにと心底思います。そして昨日も言いましたが、こんな風に表現する力を持っている MARIKO さんにも私は感動しました。

素敵なものを紹介してくださって、ありがとうございます。 まき

・次に「アラスカストーリー」。オーロラという現象を“科学”的に解明するとともに、「ワタリガラスの伝説」を引用して、伝承という“文化”面からも、現象の解明にチャレンジし、それに一人の写真家の“物語”を重層させてゆくという、極めて意欲的なプログラムでした。一人の写真家の“物語”とは、いうまでもなく“星野道夫物語・その断章(フラグメント)・オーロラ編”ということですが、告知と上映時にこのようにタイトルの一部に表記できたら、きつともっと動員できるでしょうし、説得力を増したように思いました(そう出来なかった事情は MARIKO さんから伺いました)。構成は、前述のように3つのファクターをプロットとしてからめるわけですから、きつとご苦心されたと思います。その苦心は、充分すぎるほど実を結びんでいました。その果実は“MARIKO さんの愛”以外のなにものでもない。クライマックスの全天に踊るオーロラのシーンは、昔見たミケランジェロ・アントニオーニの映画『砂丘』のラストの爆破シーンのように衝撃的且つ感動的でした。また、通常(ルーティン)のプラネタリウム・プログラムから「オーロラストーリー」へと、分断することなく、構成を一体化されたことは、なかなか見事でした。今回、僕はプラネタリウムという施設が持つ可能性についても考える機会としたい、という課題を自分に課していましたが、その意味は充分に感じ取れました。

さて、唯一の不満を言えば、発案・構成・制作者ある MARIKO さんの名前がどこにも表記(クレジット)されていないことでした。「これは誰が考えて、誰が創ったんだろう?」。感動すると、それが知りたい。感動したあとは、少し余韻が欲しい。映画の最後に流れ

るロールは、決して退屈なものではなく、感動の余韻(例えば、涙が乾くまでの猶予)のために必要だと思うのです。制作者のクレジットは、制作責任を担うことの表明なのであって、売名？的な行為では一切ありません。左右にスライドというのではなく、中央にムービィのように、ライズして宇宙に吸い込まれて消えてゆくような、そんな歓喜で美しいクレジット・ロール。リメイクされる時には、是非ともご一考下さるよう、周囲に働きかけて下さい。

最後に、僕が一番感動したことをお伝えします。それは、発案・構成・制作者あるMARIKOさんご自身が、ナレーション(声のナビゲーター)をなさり、しかも、録音ではなく、ライブ！！！！、であったことです。MARIKOさん、これから鑑賞に訪れる子供たちのためにも、風邪などをめされず、皆勤賞でナビされますよう、心よりお願いとお祈りしております。bye bye! 勇崎

・今日、甲府の科学館で「オーロラストーリー」と写真展見てきました。初めて甲府を訪ねましたが、科学感のある愛宕山は、良いところですね。気が付くと、富士山が「どん」とあって、甲府から見る富士山もステキでした。特に、プラネタリウムドームの先の展望台からの景色はみごとです。お城の月見櫓の様で、満月の夜に月明かりの下の富士山を観てみたいですね。写真展や「オーロラストーリー」を通して星野さんからのメッセージを受け取りました。幼稚園の子供達が写真を見てそれぞれの感想を言っているのが、とてもかわいく、人生3~4年のキャリアでも、それなりのメッセージを受け取っているのかなと、とても嬉しかったです。私は1人で東京から車で訪ねたのですが、館内を歩いていると、スタッフの方々が「こんにちわ」と声を掛けてくださったのも嬉しかったです。子供達に何かに出会うチャンスを与えることは良いことですね。今日出会った幼稚園の子供達の心にも何かの種は蒔かれたのでしょね。私も「種をまく人」にならねば、と思いました。トルコ石

・「オーロラストーリー」とても素敵でした。(あっさり)というだけではみもふたもないので少し書かせてください。まず、メインストーリーはやはりルース氷河での1ヶ月間でしょう。これを抜きには「星野道夫に捧ぐオーロラストーリー」は作れませんよね。このメインストーリーに肉付けされたシシュマレフ、カリブーを追う旅、アラスカ大学、インディアンの人々、ブッシュパイロット、その他色々ありましたがとても贅沢な構成だと思いました。しかし、これらは星野道夫を語る(紹介する)上では必然の構成だと思います。まだまだ足りないとおっしゃる方もあるかも知れませんがこれらをうまくオーロラに関連付けられていると感じました。企画、構成にはかなり苦勞されたのでしょね。プラネタリウムの技術的なことは素人なので何もわかりませんが、映像も見やすく素晴らしい出来だと思います。小学生の子供たちを連れて行ったのですが、とても喜んでくれました。そういえば「しし座流星群」の後、子供が宇宙の本を買いました。今回のプラネタリウムで今度は「オーロラの本が欲しい」って言い出すかも...。MARIKOさん、素敵なお時間を過ごさせていただきありがとうございました。 Yujiro

・こんにちわ、カナナです。1日、山梨県立科学館へ行ってきました。午前中だったので人もまばら、ゆったりと「オーロラストーリー」と写真展を鑑賞することができました。ルース氷河での1ヶ月に及ぶ撮影行の話は、私が何度も読み返した中でも好きな話だっ

たので、それが映像として再現されたことがとても嬉しかったです。それに先住民に語り継がれてきたオーロラの神話。映像も語りも、どれもが心に染み渡っていきました。

・こんにちは。直美です。先週の日曜日2日、大阪から山梨まで行ってきました。感想は一言「星野さんこんにちは☆」です。ほんとすばらしかったです。当日、私は平塚に住むボーイフレンドと一緒に朝8時くらいに平塚を車を出て山梨県立科学館にやってきました。そこにたどり着くまで平塚から山梨に向かう道はいろいろあるみたいなんです。私たちが行ったルートあの風景というのは大阪に住んでいる私にとって関東に住んでいる人がうらやましくなるものでした。それは、富士山です。私にとってみれば、あの富士山を眺めることのできる環境に住んでいる人はなんて幸せなんだろう、毎日が富士山のスケッチじゃないのってな感じでした。高速を乗っていても、いつも富士山が見え隠れして、そのたびに車の中では大騒ぎでした(私一人興奮していたんですが…)でも、結構山梨県立科学館までは遠かったです。いろいろと道に迷ったりして、でも2人は平気でまあ何とかなるって気持ちですばらしい風景を楽しみながら、でも星野ファンの私としては首が富士山の山上届くくらいまで伸ばしながらドライブしていました(笑) 科学館では、真理子さんが私たちをやさしく迎えてくれました。真理子さんとお会いするのは初めてだったんですが、星野さんの話で盛り上がりいろいろいいお話ができました。真理子さんはとてもやさしい人です。お互い、「彼(道夫さん)のああいう所がいいですねー、こんなところが好きなんです、と彼氏そっちのけで話をしていました。ほんとごめんなさい。写真展の反応はノートを見ても分かるようにいろんなことがかかかれています。でも、私の中では星野さんを感じれとれたので良かったです。今回、星野さんの写真展に行くのは初めてでした。このことを知ったのは、通信販売で星野さんの卓上カレンダーを買った際、チラシがいっしょにいれてくれていたので知りました。いつも写真集で見えていたのですが、やっぱり大きい写真で見るというのはまったく迫力が違いますね。今回、一番嬉しかったのは一緒に行ったボーイフレンドも私と同じように感動してくれたことです。彼は、言葉が大好きといった点と色々な人の人生を学べるといった点で本を読むことが大好きなんです。しかし、星野さんのことは知らなくて、写真展に行くまで星野さんを知っていたとしても、私がいつも話している動物写真家といった感じだったんですね。そういった星野さんのことを知らない人だったんですが、2日、あの写真と言葉を見て「俺、これ好き☆」とってくれました。そのときほんと嬉しかったです。自分が信じているものや、自分が自慢するものを理解してくれたり、その相手が自分と同じような考え方や感じ方をしてもらったときって、何か「じ〜ん」としますよね。それでした。あの、一角にあった写真展のベンチの上に置いてあったノートを見たときもそのように「じ〜ん」としました。「みんな星野さんが好きなんだー。」とか「みんな自分だけの星野さんと思ってるんだー」と。わたしも、これほど星野ファンがいるとは思いませんでした。本で会う星野さんしか知らなかったのも、私だけの星野さんと思っていました(笑)。でも、そんな星野さんだからこそより多くの人に知ってほしいです。「オーロラストーリー」を見終えたあと。2人とも感動していました。私はボーイフレンドが見終わった後なんてコメントするのとかドキドキしながら待っていました。「もう一度、写真、見に行こう。」彼の大好きな写真は、二階から降りる階段から見る壁に飾ってあった「天井が氷で囲まれている川」の写真でした。それをじっと見て、「もうこれないかもしれないよ。」「ここに流れている水の音ってどんなだろう…」といいながらずっと見つめ

ていました。そして、彼は星野さんの写真を見て「これは本物の写真だね。ちゃんと感じる」といってくれました。やはり、同じカメラで同じものを撮ったとしても人に感動与えるところのできるものとできないものがあると思うんです。それは撮る人による。11月2日という日はとても私の中で大きな一日となりました。このような感動を与えてくれた、星野さん、真理子さん、その他の人たち、どうもありがとうございました。直美

・先日、念願の星野さんの写真展に行くことができました！私は写真にも感動したのですが同じくらい「オーロラストーリー」がよかったです。今まで文字として星野さんの言葉を見ていました。それが映像と共に、音として耳から入ってくることは新しい感動でした。まるで星野さんが実際に語っているかのような感覚になったのです。今年の5月に初めてアラスカに行きました。今、またアラスカを旅したいという気持ちでいっぱいです。いつかまた旅へ行くその日まで、ポスターやカレンダーの風景に思いを馳せながらいろんなことを想像しようと思います。写真展示の場所にあった1冊のノート。これまでこのBBSに書き込まれている方のメッセージを多く発見しとても嬉しい気持ちになりました。それだけでなく、子ども達の素直な感想や、偶然星野さんのことを知った人の感想などがとてもあたたかく感じることができました。富塚訓子

・その後、プラネを見ました。前回の赤祖父先生の講演会に引き続き、2度目。見ているうちにやはりそのすばらしいと感じました。それだけでなく、アラスカという設定で投影される星空に、同時に見られる地面に立ったオリオンと反対側のはくちょう(日本では絶対ありえない景色です!)に気がついたり2度目で細かいところまで楽しめました。MARIKOさんとお話したことと「オーロラストーリー」をまた見たことで、この番組を他のプラネでも上映していただけるよう、今後も働きかけを続けていこうという気持ちを強くしました。MARIKOさん、本当にどうもありがとうございました。いとてつ

・続いてプラネタリウムで鑑賞した「オーロラストーリー」。のっけから大迫力の空撮シーンでは、信頼できる旧知のブッシュパイロットが操縦する小型機に乗って撮影地点へ向かった星野さんになったような心持ちになりました。思うような写真が撮れるまで、極寒の雪原にぽつんと一人ぼっちでオーロラの出現を待つのは、いったいどんな気持ちだったのだろう。もしかするとあのような撮影行には、世間から隔てられた過酷な場で一定期間すごしてから「大人」になって帰ってくるというイニシエーション(通過儀礼)のような作用もあったのかもしれませんが。そして「地球から宇宙に向かって唯一開かれたドーナツ状の窓」でまさに「狂ったように」乱舞するオーロラ！なぜか宇宙があつて地球が生まれ、われわれが地上に出現して今こうして暮らしているちょうど同じころ、クマやクジラも自分たちの場で自分たちの生命を懸命に生きていることの不思議さ。——そのことに心を奪われつづけていた星野さんが、オーロラにどうしようもなく惹きつけられたのはとても自然なことだったのだと、「オーロラストーリー」を見て得心がきました。自分たちをとりまく不可思議な世界をきちんと心に納めるために、人間には物語というものが不可欠なのだとなれば、星野さんがアラスカへ向かい、多くの優れたシーンをフィルムに定着させ、多くの人たちと温かく心を通わせながらも、あんなに急ぎ足であちら側へ旅立ってしまったという容易には信じがたい事実を、残されたわれわれが心にすんと納めるために最も優れた物語。そう、「オーロラストーリー」はまさしくそのような

物語でした。すばらしい番組を現出させてくださった関係者のみなさんに、心から敬意と感謝をささげます。ありがとうございました。 グレン横田

IV 「アラスカから次世代へのメッセージ」

IV-1 経緯にかえて（オーロラクラブ会誌“Aurora Times”に寄せた記事）

人と人がつながる、人と自然がつながる～オーロラクラブ 10 周年記念イベント～

2001 年 10 月 20 日。どこまでも高く、“抜けるような”という言葉がぴったりの青空が広がり、「オーロラクラブ 10 周年記念」を祝福しているかのような秋晴れでした。北は北海道から、南は九州から、言葉どおり全国各地からオーロラクラブとアラスカをキーワードにした方々が山梨県立科学館に集いました。「何故山梨でやるの?」と思われた会員の方もきっと多かったことと思います。その経緯について、少しお話させていただくことにいたしましょう。

実は私がオーロラクラブの会員になったのは、2000 年の年末です。けれども、オーロラクラブの、その計画について星野さんご自身から聞いたことがありました。1990 年 3 月、まだたくさん雪に覆われた、それでも日差しはもう春を感じさせるフェアバンクス郊外。風が吹くと、木の上の雪が舞い、それがきらきらと青空の中に光ってそれはそれは美しい光景を目の前にしながら。「子ども達をアラスカの氷河へキャンプに連れて行く」その話を聞いたときに、「私も行きたい!」とすぐに言いそうになり、自分が「子ども」としていいのか、他に何か手立てがあるのかわからないことに気づき、少し遠慮しつつスタッフのことなどを少しお聞きしたのだと思います。大学時代の友人たちと協力体制を作っていることなどをお話してくれました。そうして、あんまり「連れて行って」といえなくなってしまう、そのままでした。1991 年、92 年には、私が当時住んでいた札幌で星野さんの写真展が開催され、そのときお会いしたときにも、キャンプの話を聞きました。そのときも、「私も参加したい」と言いたいけど言えなかったような、そんな感じがします。

1996 年 8 月、当時大学院生でしたが、さまざまなことで困難にぶちあたり、どん底を経験しているような最中のあの出来事。私はますます混乱しました。どうしていいかわからないまま、とりあえずフェアバンクスへ行き、星野さんのメモリアルに出席しました。今から思うと、あのときのアラスカがまた私に一つの転機を与えてくれたのだと思います。絶望から這い出し、前に進む道が見えてきました。(そのころ、何か「アラスカ」あるいは「星野さん」へのつながりを持っていたいと思い、オーロラクラブのことを思い出したけれど、なぜあのときすぐに入会しなかったのだろう? それはちょっと覚えていません・・・(苦笑))96 年のアラスカ行きが与えてくれた私への転機は、現在の場所への就職ということにもつながっています。97 年 4 月に私は、愛知県から山梨県に引っ越してきました。山梨県立科学館開館準備を経て、今は館の天文担当として、プラネタリウムにたずさわっています。

2000年の暮れ、インターネットで検索をしている途中に「オーロラクラブ」のことを目にしました。突如としていろいろなことが蘇り、今度こそ、時期を逸せず入会しようと、すぐに入会したわけです。そのときのみたHPは、鳥海なおみさんのMoons Truck内の紹介でした。星野さんのことを思い、集う人々がこんなにいることにびっくりしました。また、オーロラクラブ入会後に送られてきた文集「あらすか」には、何故あのときに「どんな形でもいいから参加させて」と強くお願いできなかったのか、と後悔し、そうしていたらまた違う人生だったか、との思いにさせられました。そのときには、まだ自分で決めたはずの仕事と、それまでの自分がやってきたことがうまくリンクしているとは言えなかった状態だったのです。

私が仕事をしている山梨県立科学館のプラネタリウムでは、「プラネタリウム番組」(プラネタリウム(星を映し出すプロジェクター)、スライドプロジェクターやビデオプロジェクター、音響、さらには大型映像というものがさまざまに組み合わせられて完成するもの)を投影しています。これは、館のスタッフが企画し、またシナリオも書いて、番組のプロダクションと共同しながら制作するものです。私は大学院時代、オーロラの研究をしていたので、プラネタリウムでオーロラをテーマにした番組をつくるのは、開館当初からの目標でもありました。もう一方で、星野道夫物語ともいえるようなものをつくりたい、と開館して間もないころに企画を出したこともあります。(山梨に何の関係があるのか?とすぐに却下されましたが(笑))鳥海さんのページと出会ったころには、2001年の秋にオーロラの番組を投影することだけは決まっていたのですが、内容についてはいろいろな案があるばかりで全く固まっていない状態でした。しかし、プラネタリウムのオーロラ番組の共同企画として、星野道夫写真展ができそうな機運が回ってきたのです。私が言い出さなければ言い出すような人は当館にはいませんが、館長は、数年前に私が企画した「星野道夫物語」のことを覚えてくれて、館長のほうからその提案がありました。

「写真展ができそうだ!」ということ、鳥海さんに連絡しました。すると、鳥海さんが、新開さんと連絡をとられるときっとよいですよ、と中継ぎをしてくれたのです。それが、新開さんたちが今年の10周年記念イベントについて打ち合わせをするという数日前のことでした。「オーロラクラブさんも今年中には、出版、写真展、スライドショーなどを計画されているとのこと。そのような活動の趣旨とすり合わせた上で、”星野道夫”と”オーロラ”をキーワードに、高橋さんの企画との建設的かつ拡散的な接点があればと願います。」これが、そのときの鳥海さんのメールです。

そうやって、長い時間を経てようやく新開さんや伊藤さんにお会いすることができました。しかも、今思えば最高のタイミングだったのでしょう。最初に4月にお会いした時には、特に何も決まらなかったのですが、話を進めていくうちに、赤祖父先生をお呼びして講演をしたいということ、会場を山梨にしたいということ、スライドショーをやりたいということ、いろいろとお互いにメリットになるような条件がそろってきました。一方で、一連の素晴らしい人々とのつながりに勇気を得た私は、プラネタリウムのオーロラ番組を、星野道夫を軸として展開することを本気で考え始めていたのです。

そうやって今回のイベント「アラスカから次世代へのメッセージ」が実現しました。赤祖父先生の講演会「北極圏から地球を思う」、プラネタリウム投影「オーロラストーリー」、オーロラクラブ制作のスライドショー「ナヌークの贈りもの」の3部構成です。赤祖父先生の講演の冒頭のスライドは、今から13年前、ある雑誌に掲載された写真、赤祖父先生と星野さんがフェアバンクス郊外の湖で焚き火をしながら対談している記事の写真でした。これは、私が13年前、高校生のときに出会い、その後の私の人生に大きな影響を及ぼしたその1枚だったのです。

長い間の思いが結実した日でした。もちろん、これは「オーロラクラブ10年記念イベント」としてオーロラクラブにとっての記念すべき日でしたが、私にとっても自分の人生に大きな意味をつけてもらった、そういう日でした。また、今回のイベントを通して、素敵な人々とのつながりがさらに広がりました。多くの方が感想を残してくださいましたが、それについては、また他の方の投稿に譲りたいと思います。

今回の貴重な経験をさせてくださった新開さん、伊藤さん、星野直子さんに心からお礼を申し上げたいと思います。また、彼らに絶妙のタイミングで出会わせてくれた鳥海さんにも、遠方より(とても不便なところを)お越しいただいた皆々さまにも、深々と頭を下げたい思いです。そして、こうやって人々をつなぎ、人々の思いを自然へと結び付けながら、生きている星野道夫さんにも・・・どうもありがとう、心を込めて。

IV-2 内容

主催： 山梨県立科学館 共催：オーロラクラブ 後援：山梨大学

- ・実施期日 平成13年10月20日(土)
- ・実施時間 午後4時00分から午後7時10分
- ・場所 多目的ホール+スペースシアター
- ・講師 赤祖父俊一氏(アラスカ大学国際北極圏研究センター)
- ・参加人数 約200名(当日までの申込は240名) (県外約120名)
- ・日程

15:30 受付開始

16:00 あいさつ(館長、新開氏)

16:10 赤祖父先生講演「北極圏から地球を思う」

17:15 質疑応答

- 17:35 講演終了
- 17:50 プラネタリウム投影「星空解説」＋「オーロラストーリー」
- 18:45 休憩
- 18:55 スライドショー「ナヌークの贈りもの」
- 19:05 閉会

・内容

○赤祖父先生講演会「北極圏から地球を思う」

極北の自然、オーロラの魅力、オーロラのしくみ

1時間ほどの講演のあと、大変活発な質疑応答がなされた。先生は、今回の観客の反応のよさに大変ノッテいた感じである。質疑応答の内容は、「オーロラはなぜドーナツ型なのか」といったオーロラの基本的な知識について、あるいは、「アークティックレフュッジの問題をどう思うか」というアラスカの自然保護の問題、「地球温暖化は進んでいるのか」というもっともホットな環境問題、また「今大学院生で将来環境のことに携わりたいと思っているが、そういうチャンスはあるだろうか」と若い人からの質問。今回の観客は、みな目をきらきらさせながら、赤祖父先生の話に聞き入っていた。質疑応答の時間が足りなく、せかしてしまった感があり、その点反省すべきであった。

○プラネタリウム投影「星空解説」＋「オーロラストーリー」

投影：高橋真理子

「オーロラストーリー」については、II章参照のこと。

○スライドショー「ナヌークの贈りもの」

星野道夫「ナヌークの贈りもの」(小学館)をもとにしたスライドショー (10分)

ナレーション：中井貴恵

音楽：遠 TONE 音

制作： オーロラクラブ

IV-3 来館者の反応

以下、参加者へのアンケートから抜粋（オーロラストーリー部分は除く）

【講演会】

・とにかくすばらしかった。とても密度の濃いお話が聞けて、大変うれしく思いました。

・赤祖父先生は人柄も良く思った以上に解りやすく来て良かったです。

・オーロラについて間違っていたことを正しく覚えなおすことが出来ました。先生の手間を惜しまない

御人柄にも感じ入りました。

・先生のナマの声を聞き、ナマの講演会、大変感動いたしました。いつかは自分の目で見たい、オーロラ！！2年後には必ず行きたいと思います。

・地球温暖化についてのお話をもっとうかがいたかった。

・はじめて科学的にオーロラの話をお聞かせいただき楽しい時間でした。もっとお話を聞きたかったです。

・今まで良く知らなかったオーロラについて、大変解りやすく解説され新たに興味が沸いてきました。金をためて2年後にはアラスカへ行きたい。

・オーロラの姿に驚きました。特にリアルタイムの映像は感動しました。説明も途中眠ってしまいましたが面白く拝聴できました。オーロラは南極ではどう見えるのか？（地球磁場がNとSで異なるから）

・普段目先のことばかりに追われて生きていますが地球や宇宙に目を向けることができ、新鮮でした。オーロラって宇宙現象だったんですね…。赤祖父先生の人柄がにじみ出るお話ぶりに感激しました。

・温暖化についての意見やオーロラが真空高圧放電現象とはじめて知りとっても興味深かったです。

・オーロラについて良くわかり大変面白かったです。時間が少なくてもものたりない気もしました。“次世代へのメッセージ”として、アラスカから見た地球環境の話をもっと聴きたかったです。

・知ることの楽しさ、可能性などの言葉が話を聞いていて浮かびました。

・せっかくこのような優れた研究者を招いたのに、このイベントのテーマである「アラスカから次世代へのメッセージ」をはっきりと聞く事が出来なかったように思う。Q&Aの際にも、いかにオーロラを効率良くみることができるか、という点にばかり関心があって、肝心のメッセージ、北極から何を地球を思い何を我々に語りかけるのか、に言及される場には、遠かった。全体的に概して百科全書的知識にフォーカスがいていたようだけれど、赤祖父さんからはもっといろいろな話をたくさん聞けたはず。それを誘導質問的でなく、講演者 audience 双方のにとって有意義な場に導くのは、司会者の役目であると思います。期待していたよりも不毛なレクチャーでした。

・オーロラの発生の仕組みが理解できました。科学の発達した現在であっても未だ解明されていない部分が多いという技術とも神秘的だと思いました。2~3年後のオーロラの予想が出来るようになったら是非アラスカに行けばっちり本物のオーロラを見たいです。

【スライドショー】

・10分と言う短い時間でも、ものすごく充実した内容だと感じました。

・ナヌークは私にとって“幸福な動物”です。極寒に生きる生き物はなぜか暖かさを伝える。「オーロラストーリー」地続きのスライドショーはとても素敵でした。

・多くの小、中学生に見せたい

・ナヌークの贈り物もぜひ両親に見せたいと思うスライドショーでしたので、また、東京でこのような企画があればご案内頂きたいです。

・感激しました。ありがとう。

・初めて買った星野さんの本でした。はじめて見た時ただ涙が流れました。良かったです。

・本で見ましたが音楽を入れるとまた素敵でした。もう一度見たいです。

・大自然の中で生きる白熊が素晴らしい。人間に飼われているペットや動物園にいる動物がかわいそうに思える。

・とても好きな物語でした。今の戦争があるこの時代こそ、1番重要な「生命の物語」だと思います。

・星空の中で見る“ナヌーク”は幻想的でもありました。こういう形で味わう星野道夫さんの言葉の持つ力強さを改めて感じました。

・白熊以外にも他のシーンを入れれば中身も濃くなると思います。「ナヌーク』の説明が良かった

・大画面で見る星野さんの写真はとても迫力有り、すばらしかった

・今回アメリカで起こったことで、人のはかなさ、おろかさ、などを感じていました。その対極に“自然があるということ“を考えました。

V 星野道夫写真展～悠久なる時の流れ～

V-1 経緯にかえて(写真展あいさつパネルより)

星野道夫写真展「Alaska～悠久なる時の流れ～」に際して

地球上には、非常に多様な生き物が生きています。人間は、時間を目に見える形にするために時計を作成しましたが、この地球に存在している「時間」はそれだけではありません。生命一つ一つが自分の中にもっている時間、あるいは、地球自身が抱えている時間、そんなものも確実に存在しています。

日常に追われている私たちに、ふと、そんなことを思い出させてくれる写真を撮り続けていたのが、星野道夫氏です。彼は、アラスカの雄大な自然とそこに長い間生きてきた人々に魅せられ、その様子を、美しい写真と文章で残してきました。彼自身、若いころ遠い自然に思いを寄せ、思いのまま惹かれるように出向き、そこに住み、人に会い、写真を撮り、自然をみつめる中で見いだしてきたものは、生命の脆さと愛おしさだったといえるでしょう。

暗いニュースが、日々のテレビや新聞を賑わせるこのごろですが、私たちの住む地球を少し空高いところから俯瞰してみる、ふだん生活している場所とは離れたところの自然に思いを馳せる、そんなことをしてみると、生命一つ一つの大切さ、愛おしさ、それら一つ一つが鎖のようにすべてつながっている壮大さ、そんなものに気づくのではないのでしょうか？

21世紀における課題は数多くありますが、こんなことが一つ言えるでしょう。自分の境界を自分の肌と決めてしまうのではなく、地球という大きな生命にまでどこまで近づけることができるか、どこまで自分と思えるだろうか、そして、それを大切に思えるだろうか。そういったことを、星野道夫氏による写真から感じとっていただければ、と思います。

現在スペースシアターで投影中のプラネタリウム番組「オーロラストーリー」もまた、星野道夫氏を軸としたドラマが展開されています。こちらも写真展とあわせてお楽しみください。

写真展開催、プラネタリウム番組制作において、星野道夫事務所に多大なるご協力をいただきました。また、写真展のデザインは、三村淳氏によって手がけられました。この場を借りて、心から感謝申し上げます。

山梨県立科学館

V-2 内容

構成：三村淳、星野直子

作業：高橋真理子、石倉孝司、加々美正寿、戸沢敏男(山梨県立科学館)

搬入、搬出：西武運輸

【見取り図】



【展示写真一覧】

| 番号 | 写真の内容 | 近くのキャプション |
|----|---------------|--|
| 1 | 満月とオーロラ | |
| 2 | つぶらな瞳のあざらし | |
| 3 | ナヌーク3匹だんらん | |
| 4 | こちらをにらむハクトウワシ | ぼくが見つめているこのハクトウワシは、過去にも未来にも生きてはいない。そんな時間などは存在しない。まさに、この一瞬、一瞬を生きているのだ。そしてぼくもまた、遠い昔の昔の子どもの日々のように、今この瞬間だけを見つめている。一頭のワシとぼくがわかちあう奇跡のような出来事。過ぎ去っていく今が持つ永遠性。その何でもないことの深遠さにぼくは魅せられていた。 |

| | | |
|----|----------------|--|
| 5 | 雪解けの川を渡るカリブー | 私たちが日々関わる身近な自然の大切さとともに、なかなか見ることの出来ない、きっと一生行くことができない遠い自然の大切さを思うのだ。そこにまだ残っているということだけで心を豊かにさせる。私たちの想像力と関係がある意識の中の内なる自然である。 |
| 6 | 焚き火の前のミチオ | |
| 7 | 霜のつく秋の木の実 | |
| 8 | 越冬準備のアカリス | |
| 9 | アラスカの秋の恵み | |
| 10 | 餌をはこぶシロフクロウ | |
| 11 | オコジョ | |
| 12 | 氷にとざされた冬の実 | |
| 13 | 木にとまるハクトウワシ | |
| 14 | ライチョウ | |
| 15 | コミミズク | 僕たちが生きてゆくための環境には、人間をとりまく生物の多様性が大切なのだろう。オオカミの徘徊する世界がどこかに存在すると意識できること……。それは想像力という見えない豊かさをもたらし、僕たちが誰なのか、今どこにいるかを教え続けてくれるような気がする。 |
| 16 | マッキンレーにかかるオーロラ | 冬の凍てつく夜空に、音もなく、生き物のように舞う冷たい光。・・・オーロラは、それを見る者を、日々の暮らしからしばし立ち止まらせる。ある冬の夜、竜巻のように駆けめぐるオーロラを眺めながら考えたことがある。人が一生を閉じる瞬間、だれでもあるひとつの強烈な風景を思い出すとしたら、自分はアラスカで見続けたオーロラかもしれない、と。 |
| 17 | 赤い実をついばむ鳥 | |
| 18 | 巣にたたずむ鳥の卵 | |
| 19 | タテゴトアザラシの親子 | |
| 20 | キスをするアザラシ | |
| 21 | こちらを見据えるシマフクロウ | |
| 22 | 眠いアザラシ | |
| 23 | 霜のつく草花 | |
| 24 | 足あとをのこすナヌーク | |
| 25 | 親子がも | |
| 26 | 何かに見入るナヌークの親子 | |

| | | |
|----|-------------------------|---|
| 27 | 霜がびっしりつく葉 | |
| 28 | すずらん | 頬を撫でる極北の風の感触、夏のツンドラの甘い匂い。白夜の淡い光、見過ごしそうな小さなワスレナグサのたたずまい・・・ふと立ち止まり、少し気持ちを込めて、五感の記憶の中にそんな風景を残してゆきたい。何も生み出すことのない、ただ流れてゆく時を大切にしたい。あわただしい、人間の日々の営みと並行して、もう一つの時間が流れていることを、いつも心のどこかで感じていたい。 |
| 29 | ワイルドクロッカス | |
| 30 | ホッキョクジリス | |
| 31 | 残雪の間から顔を出す花 | |
| 32 | マーモット | |
| 33 | 秋の木の实 | |
| 34 | 真っ赤に燃える夕焼け | |
| 35 | 秋のツンドラのカリブー | |
| 36 | ツンドラの地衣類 | |
| 37 | カンジキウサギ | |
| 38 | マッキンレーと秋のワンダーレイク、ムースの親子 | <p>内陸アラスカを旅している時、遠い雲上に浮かぶマッキンレーの姿にはいつも心を奪われた。そしてこの山の素晴しさは、氷河の下に広がる裾野の美しさにもあるだろう。アルパインツンドラの四季の移り変わり、壮大な谷。大地を網の目のように流れる川、そしてそこに生きるさまざまな極北の動物たち・・・この裾野に帰って来ると、僕はいつもホッとした。アラスカには珍しい、優しい自然に包まれた世界だからだろう。</p> <p>無窮の彼方へ流れてゆく時を、めぐる季節で確かに感じることができる。自然とはなんと粋なばかりいをするのだろうかと思えます。一年に一度、名残惜しく過ぎてゆくものに、この世で何度めぐりあえるのか。その回数を数えるほど、人の一生の短さを知ることはないのかもしれませんが。アラスカの秋は、自分にとって、そんな季節です。</p> |
| 39 | 生まれたばかりのカリブー | カリブーの子どもが寒風吹きすさぶ雪原で生み落とされるのも、一羽のベニヒワがマイナス 50 度の寒気の中でさえずるのも、そこに命のもつ強さを感じます。けれども、自然はいつも、強さの裏に脆さを秘めています。そしてぼくが魅かれるのは、自然や生命のもつその脆さの方です。日々生きているということは、あたりまえのことではなくて、実は奇跡的のこのような気がします。 |
| 40 | 朝もやの中に、たちつくす一匹のカリブー | <p>すべての生命が動き続け、無窮の旅を続けている。一見静止した森も、そして星さえも、同じ場所にとどまってはいる。僕は人間が究極的に知りたいことを考えた。一万年の星のきらめきが問いかけてくる宇宙の深さ、人間が遠い昔から折り続けてきた彼岸という世界、どんな未来にむかい何の目的をおわされているのか、という人間の存在の意味・・・。そのひとつひとつがどこかでつながっているような気がした。けれども、人間がもし本当に知りたいことを知ってしまったら、私達は生きてゆく力を得るのだろうか。それとも失ってゆくのだろうか。そのことを知ろうとする想いが人間を支えながら、それが知り得ないことで私達は生かされているのではないだろうか。</p> <p>ある日、ツンドラの彼方から現れ、風のようにツンドラの彼方に消えてゆくカリブー。通り過ぎてゆくその足音は、アラスカの原野が内包する生命という潮の流れのようだった。</p> |
| 41 | 向かってくるムース | この土地に根を下ろすことを決めてから、自分を取りまく風景はたしかに変わってきた。いや、 |

| | | |
|-------|----------------------|--|
| | | 風景は同じなのに、自然も、人々の暮らしも、曇りガラスをとりぞいたように透けて見えている。北極圏のツンドラを大移動するカリブーの大群も、南東アラスカの海で力強く舞い上がるザトウクジラの姿も、そしてこの土地で生きるエスキモーやインディアンの人々さえも、彼らの命がどこかで自分の短い一生と重なってくる。それはまた、生命あるものだけでなく、この土地の山や川、吹く風さえも自分と親しいつながりを持ち始めている。これまで、どれだけアラスカの奥深く入り込んでいても、ぼくはただ素晴らしい映画を見ている観客だったのかもしれない。 |
| 42 | 飛ぶハクトウワシ | 人間の気持ちとは可笑しいものですね。どうしようもなく些細な日常に左右されている一方で、風の感触や初夏の気配で、こんなにも豊かになれるのですから。人の心は、深くて、そして不思議なほど浅いのだと思います。きっと、その浅さで、人は生きてゆけるのでしょう。 |
| 43 | サケを目の前にしたグリズリー | |
| 44 | 草むらに潜むグリズリー | |
| 45 | ブリージングするザトウクジラ | 遙かな海岸山脈をのぞめば、いくつもの谷が氷河に覆われているのが見える。かつてこの土地を埋め尽くした氷河がゆっくり後退し、新生の大地にはいつしか森が生まれ、深い谷間には押し寄せる海と共にクジラが戻ってくる。地球の歴史は一体何度こんなことを繰り返したのだろう。ぼくは何か不思議な気持ちにとらわれていた。森も氷河もクジラも、悠久な時の流れの中で、どこかで深くつながっているような気がしたのである。 |
| 46 | 紫色のオーロラ | |
| 47 | 深いブルーのアイスケイブ | |
| 48 | コケに埋もれるムースの角 | |
| 49 | 蒼い風景の中にそそり立つクジラの骨、半月 | |
| 50 | 苔むした南東アラスカの森 | |
| 51 | マッキンレーに舞うオーロラ | |
| 52、53 | ブルックス山脈を背に雪原をわたるカリブー | |
| 54 | 冬の眠りからさめたばかりのユーコン川 | |
| 55 | 崩れ落ちるハーバード氷河 | |
| 56 | 後退するコロンビア氷河 | |
| 5758 | 夕日にたたずむナヌーク | |
| 59 | ナヌークアップ | |
| 60 | 眠りにつくナヌーク | |
| 61 | 広大な雪原をわたるカリブー | 雪の世界の美しさは、地上のあらゆるものを白いパールで包み込む不思議さかもしれない。人の一生の中で、年月もまた雪のように降り積もり、辛い記憶をうっすらと覆いながら、過ぎ去った昔を懐かしさへと美しく浄化させてゆく。もしそうでなければ、老いてゆくのは何と苦しいことだろう。 |

| | | |
|----|----------------|--|
| | | 僕はここでカリブーの春の季節移動を待つ。森の森林地帯で冬を過ごしたカリブーは、数十頭から数百頭の群れとなり、それぞれの場所から一千キロもの旅をへて北極圏に集まってくる。彼らはここで出産をし、やがて巨大な群れとなりながら、極北の原野をさまよい再び南への旅につく。 |
| 62 | 雪原をわたるグリズリーの親子 | ある日、遠い山の斜面をグリズリーが歩いていた。原野でクマと出会う、それは何という体験なのだろう。そこに一頭のクマがいるだけで、広大な風景はある緊張感をもってします。 |

* 上記の写真タイトルは、高橋がこれまでの写真集を参考に勝手に名前をつけたものです。

【写真展風景】(省略)

V—3 来館者の反応

以下、写真展会場においた感想ノートより

・りすやアザラシがみれてよかった。とも

・とてもすばらしいと思った。どうすればそういう写真がとれるの？と思った。

・星野道夫さんを敬愛するものとして。友人から今回の写真展を知らされた。とても心が躍った。またあの大きな写真がみられるのだ、と。反面、あ、また星野さんがたくさんの人ものものになってしまう、とシット心も湧いた。私の心はいつも複雑である。この世に人間と生まれてきたものとして、数多くの素晴らしいものを知り、体験し、感動し、そしてそのものに一步でも近づきたいと願う。そして必ず誰かに伝えたい。自分だけのものにしておくのはもったいない、といつも必ず思うのに、伝えた相手やまた、自分の知らない「誰か」が自分以上にそのものに興味を持っているト心のどこかがキュンとなる。今回もそうだ。以前、銀座の松屋デパートと横浜のデパートで星野さんの写真展をみた。デパートの開店時間前から待っていたのに、すごい人で入場制限を受けた。正直、そんなにたくさんの方が星野さんに関心をもっているとは思っていなかった。改めて星野さんの偉大さを思い知らされた。押し合い、へし合いする中で、くい入るように、写真を見た。どんなにたくさんの方がいようと、一枚一枚の写真の前にたつととたんに大自然の中でファインダーを通した星野さんと目となり、心が伝わってきた。写真集を買って帰った。展示されていた写真のほとんどが収まっていた。何度も繰り返しみたが、大きな写真の強烈な印象にはかなわない。きっと実際の場で目の当たりに見ていた星野さんの印象(感動)には、私自身もその場で見るまでは近づけない。そんな悲しい気分になってしまう。でも気持ちが息詰まったとき疲れたときに、この写真主を開くと不思議に心が落ち着く。星野さんのエッセイ集も大好きである。作家ではないのに、決して文章が上手とはいえないと思う。でも星野さんは詩人です！しかし、アラスカの大自然の素晴らしさとアラスカを愛する人たちの心の豊かさをエッセイという形で私たちに語りかけ、心にしみこませてくれるのは星野さんの右に出る人はいないのではないかと思

うほど、星野さんのアラスカを愛する心がいっぱい詰まっている。科学館でのこの写真展はすこし寂しい。でも星野さん自身が決してハデ好きではなく、きっといつも自然体の方だったと思うので、今回は今回でとてもよいと思う。小さなスペースの写真展でも、そんなに押し寄せる人波ほどの賑わいがなくても、この先ずっと、いつもどこかで星野さんの心を感じ取り、地球や命の尊さを偉大さを自然に受け止める心を多くの人に広めて欲しい。 11. 3 奥山巴恵

・いろんなものがたのしかったよ！わたしたちにはふだんみれないふくろうなどがみれてよかった。

・また星野さんに会えました。 公文

・こんなところで、星野氏の写真に出会えるとは思わなかった。正直、得をした気分。やっぱりそのシャープさや色、アラスカそのままが心の中に飛び込んでくる星野氏の写真に感動する。どうもありがとう。 Iwa

・はじめて見せていただきました。広いアラスカの大地が目の前にあらわれたようです。同世代として限りなく目標に向かっていく姿に感動しました。私も目標を探している旅ですので、心の中で声援を送っています。長田

・動物もテリトリーを持ち、その場所を守ろうとする。しかるに人間も同じように自分の場所を守ろうとする。しかたのないことであるのか。 今日太陽は輝き、雲は気分よく流れて、風が木々を踊らしている。気分のいい午後だ。しかし、この青い空のずっと向こうでは愚かな戦いが続けられている。俺は人間であることがいやになる。人間であるなら、人間がやめられないのなら、アラスカの森でマウンテンマンになりたい。この星から人間なんてくだらない動物が全滅したらどんなにおだやかな時間が流れてゆくだらう。そうなったとき、宇宙のずっと上のほうから、美しい地球を見てみたい。第3次世界大戦、大いに結構。地球の自然を壊すことなく人間だけがいなくなりますように。 TAKA 39 歳 From 白根

・ゴマちゃんがかわいい。いろんな写真がみれてよかったです。

・ゴマアザラシがすごくかわいいと思いました。シロクマが雪の中、たった一人で歩いているのがよかった。

・ワシ、タカなどがかっこよかったぜ。ゴマちゃんかawaiiー。

・ゴマちゃんの池の下に雪のかたまり発見。もしやハナ水では？

・星野ファンの一言。星野の写真がエントランスホールのほんの一角で科学館のざわめきの中で開催されたことに落胆しています。科学館のちらしの文章にも明らかに間違いと思えるもの(わたりガラス←ワタリガラス)もあったし、低レベルさに驚きました。ちょっと考え直したほうがいいですよ。 11. 10 土橋

・1歳3ヶ月の娘が横になっている白くまをみて大喜びでした。

・今回の写真展には展示方法にずいぶん問題があるのでは？と思います。何度か星野さんの写真展には足を運んでおり、星野ファンの中には彼の残した足跡をみて、繰り返し足を運んでいる人は多いと思います。この科学館にははじめてきましたが、せめて写真展をするなら展示室など分けた空間でやっていただきたいと感じました。特に壁面にたてかけているエリアなどは子ども達が走り回り写真との間に音や者のいろいろな障害物があり、とうてい写真に集中することができない状況です。せっかくすばらしい作品だけに、作品を生かす展示方法を考えていただきたいと思いました。

・とてもすごいと思いました。自然のすごさを感じました。 高1 梶川

・ごまちゃんかわいい

・オーロラがきれいでした。あざらしがウインクしてておもしろい。

・しょせん田舎の子ども施設ですから……

・そんなことないです。デパートの混んでいる中で人の間から見るよりずーっといい。よいものはどうやってもよいのです。色々あり♪

・ごまちゃんがとってもかわいー！ 小4 佐藤

・リスがかわいい 小2 とてもすごいと思いました。シロクマがかわいかった。写真がすばらしかった。

・オーロラがきれいでした。すごいきれいだったです。

・プラネタリウムがとってもきれいだった。

・とてもきれいでした。さくらとあみとかほりすはかわいいです。 ← 子ども達なりにたくさん自然の写真をみて、いろいろと感じとっていました。ありがとうございました。進徳幼稚園、原品

・星野さんの写真が思っていたよりもたくさん展示されていて今とても幸せな気持ちです。限られたスペースでよくこれだけ展示していただけたと思います。また公共施設という不特定多数の人が来る場所で星野さんの写真展を開くのはすばらしいことだと思います。きっと星野さんも喜んでいらっしゃることでしょう。一人でも多くの人がこれを見て、何かを感じてくれたらいいな、とおもいます。大塚俊昭

・とってもすばらしいかわいい写真ですね。これをここまで行って、写すのがたいへんだろうと思います。知らない鳥、動物もいました。名前が書いてあったらよかったです。

・星野さんの写真がみられると思いはじめてここに来ました。とても力強いそして美しい写真、動物、自然、星野さんの生き方も含めすばらしいです。この企画を実施してくれた人の感性に感謝します。しかし、展示方法をみると星野さんの仕事の価値を理解している人がこの施設には何人もいないんだろうなと思われてなりません。 11. 15 伏見

・私もとてもとても幸せでした。平日なので子ども達の姿はあまりみえませんでした。子ども達の声の中で、走り回る中でまた見たいです。1歳3ヶ月の子が道夫さんのうつしたクマをみて大喜びでした。すごかったと小さな子ども達の声がきけたこと、そのことだけでも大きな意味があり、道夫さんも直子さんも喜ばれるでしょうね。オーロラストーリーとあわせて大きなメッセージがたくさんの人々の心に届いていると思います。

・関西から東京へ出張のついでに足をのばしました。展示のしかたに賛否両論あるようですが、私は平日の昼間に静かな誰もいないスペースで真ん中にいすにすわって星野さんの写真に囲まれるという幸せな時間がすごせました。・・・どんな方法であれ、本当に値打ちのあるものは、どんなときにも輝いて見る者を満たしてくれます。

・友人と車を走らせ、初めて科学館に来ました。星野道夫さんの本は好きで、読んだり、映画も何度か見ていたのですが、写真展は初めてで大きな写真を見られたのはとても嬉しかったです。感想ノートを見ていくと、展示方法についての意見がたくさんありますね。私もちょっと見づららかな、と思いました。光があたりすぎて、写真に自分の姿が映りこんでしまったり。同じ場所でやるにしても、もう少し方法があったのでは？ただ、子ども達がこんな素晴らしい作品を見ることができるというのも、大切なことだと思っています。次回、科学館で何かの写真展を企画するときには、もう少し考えて、お願いします。それにしても、星野道夫さんのメッセージをもっと多くの人と分かち合いたいですよ！

11. 16 Etsuko

・私もこれを目的に東京からきました。あまりにせまい場所にところ狭しとかざられているのにはじめはおどろきましたが、このノートの子どもの書き込みをみて、こういう展示もいいのかな、と思えるようになりました。大人が落ちついてみたいのなら、デパートなどでそれなりの場で見ればよいのです。写真の位置が低いのも子どもに見やすくてよいのではないのでしょうか。ただ大切な写真ばかりなので、けられたり、よごされたりしないか心配でもありますが・・・

・北海道の娘から当館での写真展を知らされました。神奈川から車で、秋の紅葉とともにしばし「悠久なる流れ」の中にひたらせていただきました。自然のすばらしさ、命のすばらしさを感じいたしました。神奈川朝生

・作品にさわらないでください、をもっと大きく表示してください。

・いったこともなく、実際にみたこともないのに、写真をとおして想像がふくらみます。わけもなく鳥肌がたちます。生命の神秘を感じました。私も行ってみたい！

・1996年5月に八ヶ岳で星野さんの講演をききました。またいつかアラスカを訪ねたらお目にかかれる日もあるだろうかと思ったりしながら・・・でもすべてそのときしかないのだと改めて知らされる出来事が待っていました。星野さんにはもう会えないのです。人間は自然の一部でしかないことをどこまでも知らせてくれた人。11・18 りえ

・あざらし&かもちゃんたちが CHO—かわゆいかった。かがくかんにきてよかった。

・写真展開催おめでとうございます。そしてありがとうございます。星野さんの写真展は7, 8回目ですが、こんな展示もステキだと思います。こんな風に子どもが気軽に接することができて、ふとしたところに星野さんの写真が静かに力強く存在しているというのも私には幸せです。ちゃんとした展示室で静かに見るのもいいですが、子ども達の声をお聞きながら、ふとこんな世界に入り込めるというのは自然でこんなふうに日常に接することができる良さがいいと思いました。 11. 18 横浜在住 牧子

・とてもカワイかった。カンドー。

・(アザラシの絵、ふくろうの絵) たのしかった。きてよかった。

・とてもかわいかったです。(あざらしの絵)

・あるホームページでこの展示のことを知り、東京から来ました。星野さんの写真はいつどこで見ても何かメッセージを感じます。メッセージの受け取り手はどんなことを感じても勝手です。たくさんの方がメッセージを受け取ってくれたらいいですね。

・星野道夫さんの大ファンとして・・・ 1枚1枚にこめられているメッセージがまぜこぜにはられたため、全然伝わってこなくてとても残念。ある程度、理解をもっている人はだれでもがっかりするとおもいます。あまりにももったいない。ここで初めて、彼の写真に出会った人には気の毒に思うほど。せめて、各写真のメッセージだけでも伝わるとよかったのに・・・ 他の方でおこなわれた写真展を見せてあげたい！ 11. 22 Rie

・ラズベリーはおいしそうです。及川

・はじめて星野さんの写真展にきました。(東京からはるばる)「旅をする木」で写真だけではない、文章のすばらしさに心をうたれたひとりです。きちんとしたスペースではないので、ちょっとがっかりしましたが、あらためて写真から伝わる情熱(自然に対する)のようなものを感じました。まだまだずっと活躍しつづけてほしかった方です。日々のできごとによりまわされている私にとって、星野さんの写真や文は大自然の一部である人間なんだということを再確認させてくれます。11. 23 只井信子

・この中のふくろうとかプレーリードッグ！！かわええ！ それにクマ&さかなの写真、さかなの食われるときの目、すげえ。

・オーロラみたいなー

・Marikoさんありがとう！ 星野さんの写真を見れて、とてもうれしく思っています。子ども達の声のこだまする中で、この写真を見れたことを幸せに思いました。工夫した展示の苦勞(?)いや、幸せが目にかびます。遠く長崎からはるばるやってきたかいがありました。もう少しゆっくりこの場所にすわって写真を見て帰りますね。大事なものをもって帰れそう・・・(ほんとにありがとうございます)これからもがんばって、いい企画を子ども達に見せてあげてください。 ぎっちゃん

・MARIKOさん、写真展開催ありがとうございます。BBSで知り、この科学館へ横浜からきました。私も星野さんのお写真や文が大好きです。星野さんの作品に触れる機会を設けてくださり、ありがとうございました。美江

・オーロラいい

・写真展を拝見し、オーロラストーリーを鑑賞しました。2001年3月にアイスランドにてオーロラをこの目で確かめ、感動したものですから、スクリーンであの時の感動をよびおこしました。アラスカでマッキンレーの遊覧飛行も数年前に体験していますので、今日の1日はまた生きる喜びにつながりました。宮崎(67歳女)

・夕焼けの写真がとても気に入りました。パネル写真は力強さが伝わって感動です。東京

・オーロラがとってもきれいで感動しました。これからもがんばってください。

・とんぴがすごかった。

・あざらしや白熊とってもかわいいです。動いている瞬間の写真とか植物自然が目の前にあるみたいですね。堀内慧美利 11. 25

・短命だった。しかし豊かな感性をもち素晴らしい地球上での生活、人々に偉大なものを残し、感動で涙があふれました。もっともっと星野さんの世界を知りたい。素晴らしい人生であったと思います。 臼井知子

・BBSで知り、東京から来ました。高速バスできたので、遊歩道をつかってきました。平日ということもあり、ときおり子ども達のやわらかい声のこだまをききつつここから見える山々、歩いてきた遊歩道を思い返しながら、星野さんの写真を見る・・・デパートの展示では得られない豊かさが心に染み入ります。展示法などでいろいろ意見があるようですが、多くの人になにげないところで(でもプラネタリウムがあるところなんてすてき!)星野さんの写真にふれられる機会が数かぎりなくあるといいとおもいます。こういった展示がふえていくと私は嬉しいです。 山口由加

・迫力のある写真なのにどうしてこんなに動物たちがやさしい平和な目をしているのでしょうか。私たちが失ってしまったものを星野さんはみつけだして、見せてくださいます。

人生の一刻一刻にこの失ったものをとりもどしたいと思います。動物も植物もみな、いのちを一心につむいでいる姿、本当に美しくとおしいです。小寺基

・オーロラやふくろう、しろくままでお私たちがふだんみれないような写真をみることができました。北神小6年 まんたろう

・沼津からきました。展示方法に厳しい意見もあるようですが、こぢんまりしたこの展示もまたいいとおもいます。壁面に展示してある写真は、あのくらい遠くから眺めたことがなかったので、新鮮でした。小学生の社会見学でしょうか。子ども達がわいわいやってきて“かわいい！”と連呼しなあら、みていたのがほほえましかったです。BBSいつも拝見させていただいています。MARIKOさん、ありがとうございました。大野木

・自然の中で迫力のある瞬間をとらえるということは、なかなか難しいことでしょう。一枚の写真をとらえるのに数ヶ月をおよぼすことも私もTVでよく存じています。ありのままの姿をよくとらえています。私も子どももよく自然番組をよく拝見しますが、自然をもっと大切に、自然の中で人間が生活できる私たち子どもの頃のような時代に戻さなければならぬときがきているのでは。

・横浜からきました。初めて星野さんの写真展に来ました。私の暗黒の高校時代(笑)に一筋の光をあたえてくれたのが、星野さんです。今、こうしてここにいるのがとても幸せです。授業をさぼってきたかいがありました。今年の春、大学に入学し、なんだか生まれ変わったようなすがすがしい気持ちです。その新たな出発の年に遠い山梨のこの地で星野さんの写真と向いあっていること、そうさせてくれた人たちに感謝したい。MARIKOさん、関係者の方、ありがとうございました。星野さんの1ヶ月にわたる撮影行きの話は、私が一番好きな話なので、オーロラストーリーには大変感動しました。ぜひ全国に広めたい。カンナ(18歳、横浜)

・ぐうぜんここにきて、写真を目にしました。感動です。星野さんという方のやさしさ、心の広さが写真にあらわれてこちらの心をほっとさせてくれます。日ごろ、きがつかない、ちょっとした草花、小動物をこんなふうにみれる心のゆとりが今の人間には必要ではないでしょうか。44歳のおばさん

・高知から東京に来る機会があったので、念願の星野さんの写真を見たくて足をのばしてみました。初めて見ることできた写真がいくつかあったので感動しました。また星野さんに勇気付けられた気がします。慌しくすぎてゆく日々の中で、今という瞬間を大切にしていきたい。そしていつか星野さんの愛したアラスカを訪れたいです。

Masami?

・エッセイ集や卓上カレンダーでみた写真、たくさんみられてラッキーでした。これからオーロラストーリーをみます。また見にきたいです。茅野市 Yujiro

・今年は総合的な学習でアメリカアイオワと山梨の交流、比較から自分たちの地域をみつめる学習をしました。アメリカのハクトウワシが減少し、市民の活動によって、個体数

が増えていることに子ども達は驚き、感動をしていました。星野さんの写真には自然に対する鋭いまなざしと慈しみの心が伺えます。子ども達にこの写真を紹介していきたいと思いました。この写真に出会えてよかったです。

・私もBBSで見て、必ず来ようと心にきめて、やっと今日念願がかないました。スペースや環境の問題で、不満の方もいらっしゃるようですが、一枚一枚の写真をみれば、やはり星野さんからのメッセージを強く感じます。この科学館の窓からの眺めもきれい。すっかり冬です。オーロラストーリーは少し子供むけでしたね、将来子どもができればみせてみたいなあ、と思いました。遅れた私の手をひいて席までつれていってくださった方、**MARIKO**さんでしょうか、ありがとうございます。 **MASAKO**

・星野道夫さんを通して、生きとし生きるもの、人間も動物も植物も水も山も地球も宇宙もすべてにとっても強いつながりを見つけることができました。わたしたち、宇宙は、どれだけひびきあえるんでしょうか。星野さんの写真に入るとそこには星野さんのやさしい心があって、私はそんな気持ちの浸透している風景にとってもリアルなものを感じました。
倉重暁

・一点一点がすばらしい高密度の写真。純粹に写真だけを見る、という点では、確かに展示に無理があるが、科学館という公共の空間でこのようなすばらしい自然の風景、魂に届く地球という生命のすばらしさに触れることにはより大きな意義と価値があると確信する。「オーロラストーリー」との連動企画という点でもプラネタリウム⇔写真展と多角的な感動が得られ意義深い。すばらしい企画だと思います。これからもこのような企画をぜひ！全国のプラネタリウムでも上演&写真展をしてほしいな。 **From** 神奈川

・東京からみにきました。本も読みました。写真集もみました。写真展に何度も足をはこびました。ノートにいろいろな批評がされている箇所がありました。いろいろな人が今までの自分の経験をふまえ、自ら考えたことや思ったことを言葉にするのはいいことだとおもいます。きっかけが何であれ・・・確かに大きな展示スペースのある写真展のように洗練されているとは言いがたいです。でもこのスペースの中心にたって、すべての写真に囲まれたときに感じたものは今までに味わったものとは少し異なるようにおもえました。子どもから大人まで遠くからやってきた人、たまたま観にきた人、さまざまですが、星野道夫という人物に触れて、何かを感じたことが大切！だと思います。写真展では感じ得ないこの迫力と躍動感は大きな写真ならではのものだと思います。是非、こういう企画を続けてください。 12.6 東京在住 Y. K

・スバラシイ写真でした。けしきがきれいだった。またみたいです。 6の〇

・星野さんの写真展は今日で5回目ですが、今回(科学館)の写真展が一番よかったです。それは、ゆっくり時間をかけて静かに見れたからです。目ではなく脳裏にやきつけることができました。ありがとうございます。

・横浜の方から主人と2人で観にきたかいがありました。星野さんのエッセイを読めば読むほど星野さんの存在がいとおしくなります。1枚1枚の写真の前で何分でも立ち止まり、その写真の前後を想像することができます。写真という静から、目で見て「想像する」ことで「動」を感じることができる。この空間に悠久のときの流れをかんじずにはられませんでした。足を運べる限り、今後おこなわれる写真展には顔を出したいと思いません。 12.7 I. Y

・東京から朝一番で友人と一緒に星野さんの作品に会いにきました。「オーロラストーリー」と「写真展」で感動も深まりました。またアラスカに行きたい。星野さんの写真展、少しずつ内容が変わっても、変わらない「星野道夫」さんという人のまなざしがそこにあって、私の心をアラスカへと連れていってくれます。これからも本当にこういう貴重な作品を伝えていってほしいです。ありがとうございます。 東京都 石神尚子

・星野さんの写真にであって、私はそこから多くの出会いを得ました。今の私があるのは、星野道夫という人の存在があったからととってもいいくらいです。オーロラストーリー一本当に感動しました。大泣きでした。今まで文字で見ていた星野さんの言葉が音として耳から入ってきたとき、感動は頂点に達しました。こんな気持ちになるのは久しぶりです。写真の展示法については賛否両論ですが、私はこの展覧会が好きです。子どもの素直な感想をみてそう思いました。きれい！とかかわいい！とか感じることでできる写真をみることができる。なんて、幸せな子ども達でしょう！ 東京都 富塚訓子

・今日のような写真展ははじめてで驚いています。いつもデパートや図書館などのスペースでひとばかりで大人はよくても子ども達は落ち着けずにとというか、子どもを見たことがありません。これから大人になる未来の人たちにこそ、みてほしい。ふれられるくらいそばで見られるから小さい子どもにはよいと思います。子どもは好きなものには素直です！ 群馬より

・星野ファン〇号からのメッセージ 私も東京のデパートでこの展覧会にある数以上の写真を大パネルでみました。このノートを読ましてもらって、展示方法でがっかりしたという方が多いのですが、日本でもアラスカの自然に近い場所でゆっくりながめられることはとてもいいですね。デパートで足早に見るより、心おきなく見れていいんではないですか。そうゆういろんなことを吹き飛ばす力はこの写真たちは持っているのだから。やはり何度写真や本でみていて、今日思ったことはアラスカに行くべしです。星野さんが見た視点で自然を見るのではなく、自分の目で見てきたいです。ここにきて、今度飛び出す勇気とパワーをもらいました。中村直生

・千葉からバイクできました。(山梨寒い!)星野さんと同じ市川生まれです。星野さんの写真が淡々と展示してあってよいです。このノートの子どもの書いたあざらしの絵が何かいいですね。星野さんを知らない子どもさんでもきっと見たものは心に残ると思うし、この場所での写真展の価値はそこにあると思います。松原

・これだけのパネルに囲まれるのは幸せであると思う。デパートで見たときより、ゆっくりみられるし、距離感が近い。しかも、ここにたっているパネルだけではなくて、壁のほうにも展示してある。できるだけたくさん見せようとする姿勢が嬉しいです。伊藤哲也

・星野くんのまいた種がまだ生きてるようにいろんな場所で芽をだしてそしてひろがっていくことをとてもうれしく思う一人です。高橋まりこさん、ありがとう。 がっかりしたというメッセージにむけて、がっかりしないで一星野くんはここにきて喜んでいるはず！だから。何回も何回もくりかえし、再展示も楽しみにしています。藤原ようこ

・科学館につづく坂道でみえかくれしていた富士山を見晴らしのよい科学館の中からみようと階上へかけあがり窓を、ベランダをさがすと・・・そこは、星野さんの世界でした。あららゆっくりわくわくと出会おうと思っていたのに・・・でも嬉しい。どの写真も大好きなものばかりでした。今日は甥と一緒にあそびにくるつもりが急なことで甥にふられてしまいました。ゆったりと疲れがいやされました。いろいろな人がいて、いろいろな意見があっという。 (ドンロスのことばをかりれば、違うからいい) 表現する人は常に批判に育てられるのです。 みんながみんな同じように思い、感じるなんてあり得ない。人の声を否定ととらずに、エールとしてうけとめる強さもつ人だと信じています。喜代美

・北海道より実家横浜へ里帰りしたのでできました。プラネタリウムでのオーロラ、よかったです。写真の数々、コメントの数々、よかったです。四ツ倉大介、恭子

・星野さんの写真展が山梨で・・・ずっとまっていた。写真集もすてきだけど大きなパネルで見られてよかった。

・楽しみにして、有給をとってまいりました。こんな企画をしていただいた方に感謝します。

・展示の方法、スペースなどについていろいろな意見が交わされていますが、星野さんを敬愛するひとりとして思ったことは、「気軽にみられるよい展示」です。よくここまでつめこんだと拍手です。子どもがたくさんやってくるこの施設で、ふらりと見た子ども達が、「かわいいなあ」とか「大きな写真だなあ」と素直に感じてくれること、後々、それが星野氏の写真であったことにあらためて感動する(かもしれない)よい機会だと思いました。下段に展示されている作品も、子どもの目線にはぴったりでしょう。展示する場所や数の質ではなく、見た人がどれだけ何を感じたのか、ここに届いたのか、それが一番大切だとおもいます。銀座や横浜のどえらい混雑ぶりのほうが私には悲しかった。何よりも大きなパネルで再び星野氏の作品をみられたことが一番嬉しいです。あっちにもこっちにも展示されているパネルにきづくたびに、宝物に出会った気がします。(別のところにあるパネルに気づいてよかった!) 一人できたけど(しかも横浜から)ほんとによかったです。ありがとうございました。こば

・偶然にも今年の忘年会旅行が甲府のため、1日目は友人と別行動、遊歩道おの坂道は風が冷たかったです。限られたスペースですがとてもよい展示だと思います。アラ

スカの季節の移り変わりを感じることができました。プラネタリウムも内容がわかりやすく、ストーリーにも好感をもてました。また本物をみにいきたいなあ。熊谷市 小林香

・川崎からきました。バスがなかったので、甲府駅から歩いてきました。時間がない！とあくせくして道をゆくうちに、小鳥や木々、山、1つ1つの自然に気づきはじめました。ぎゅうっとこりかたまっていた心が広がって、楽しいうきうきした心の準備ができました。写真展はとてもよかったです。子どものはしゃぐ声やまぶしい日差し、日常生活の中で出会う星道さんはやはりやさしかったです。写真も足元の空間まで利用されていて子ども達にもどーんとインパクトがあるのでは？ 私は好きです。須藤みほ

・星野道夫が残してくれた多くの写真や物語は、とても深いところで私の存在を支えてくれます。同じように、星野さんのことを大事に思っている方たちの思いが込められた今回の展示と「オーロラストーリー」に触れて、あらためて星野さんとの出会いをお世話のように感じています。同じ喜びと **Sense of Wonder** を共にしたいという気持ちのあふれる今回の企画のおかげで私も心うれしく励ましを胸に生きていくことができそうです。関係者のみなさんのご尽力に心から感謝と賞賛をおくります。ありがとうございました。横田「グレン」哲也

・遠くと近くをつなぐもの。私はいつもそれを求めてきたような気がする。近くにあるのに、遠くなってしまふものを見続けなくてはならないとき、人にとって、一番必要なものとは何か、そのことを深く考えられる星野道夫さんをして、私は「孤独」であることが、単に辛く寂しいことではないと感じるようになった。星野さんを通じて出会えた真理子さん、ありがとう！ うさぎ好きの多樹

・最終日にこれてよかったです。姉とききました。スペースは少しですが、いつどこでも素敵な写真です。どんな思いで、と心めぐらせながら、大好きな白熊もいてくれて、少し遠くから見るとほんとうにそこにいるみたいです。静かにしないと起きちゃうかしら？ 外の山々もきれいですね！ Terumi Kouda

・今回、偶然ここへきて、写真展をみました。動物や空のさまざまな表情を表現できて素晴らしいとおもいます。オーロラやゆうやけ、写真でみてもすごい迫力なのに、写真と写された方は実際にみることできうらやましいです。 Y. Tomita

・南アルプスの山々がみえる最高のスペースで、とても幸せな時間をすごすことができました。まだまだずっとこのいすにすわって、星野さんの写真ときれいな山を楽しみたいです。星野さんの写真展にかぎらず、いろいろな美術展などにいきますが、これほど作品にはりこめたことは今までない気がします。人の少なさも大きな理由ですが、いいふんいきをもったスペースであることは確かです。星野さんはほんとうにやさしい視点をもった人だったんだなあ写真をみて思います。 谷光愛子

・クリスマスにはカリブーのそりに乗った星野サンタがやってくる！

・もっともっと星野さんの写真を見たい、言葉を聞きたいです。

・なんとか駆け込みで見ることができました。こうして、比較的小さなスペースでの星野道夫の写真展は静かにまどろんでいるようなやさしさを感じさせてくれますね。それは限りなくリアルな時間の記憶のはずなのだけれど、そのまま夢の時間に通じているようです。なんて不思議な男であり、なんて不思議な写真なのだろう、改めてそれを思われます。これは出版物ではわかりにくいでしょう。三村氏の苦心の展示に敬意を表します！ 12.16 ドロンコこと田所謙二

・星野道夫さま、高橋真理子さま、ありがとうございました！ 12.16 小林千佐子

VI ガイアシンフォニー第3番

VI-1 経緯

2001年3月。4度目のアラスカに行く機会を得た。いわゆるオーロラツアーに同行するというものだ。私がそんなことで行くということを知ったら彼の人にはさぞかし怒るだろうと思いながら、アラスカにいけるのだったら・・・とかなり安直な気持ちでYBSトラベルの山中さんの提案を受ける。ちょうど、2000年11月から12月にかけて、当館で星空トークショースペシャル「オーロラの夕べ」を企画した折の話。オーロラの夕べはたいへん好評で、全部で400人近い方が応募して下さった。その中で、アラスカへのオーロラツアーの宣伝をしていたので、かなりの人数が集まるのでは、と思ったが、案外そうでもなく結局ツアー参加人数は私と添乗員の山中さんを入れて9名だけだった。最低催行人員は15名であったが、山中さんの今回のツアーへの思い入れも強い。彼は強行決行した。

いわゆるツアーというものを根っから嫌っていた私であったが、9名という人数、20代から70代までそろった気さくな人々に囲まれ、楽しい旅であった。みんなよくお酒を飲み、しゃべりオーロラを待った。そんな中で、ある夕食時に、星野道夫の話、そしてガイアシンフォニーの話を、山中さんや他の人にしていくときである。山中さんが、「よし、それやろう！」と言う。半ばお酒がまわっているときだったが、「えー！じゃあ絶対ですよ！約束、絶対約束ですよ！」と何度も念を押した。山中さんは、やると思ったら必ずやる人である。本当にこの一言で実現してしまったのだから・・・アラスカから帰るなり、山中さんが総合市民会館を押さえ、私がオンザロードとの連絡をとりあい、ポスターやチケットを送ってもらって、あとはほとんどYBSトラベルのお世話になった。ガイアシンフォニー第3番の上映が終わったあと、懐かしい顔ぶれが集まって、再び酒席で盛り上がったのはいうまでもない。

この上映の実現のおかげで、山梨に住む女性2人と貴重な出会いをした。一人は、鳥海さんのBBSで、私が書いた上映のお知らせをみて、メールをくださった室方喜代美さん、もう一人は、彼女と去年の会津でのボブ・サムを囲む会で出会っていた小林千佐子さん。喜代美さんは、小林さんといつか甲府で3番の上映を実現したいと思っ

ていた一人だった。お互い、山梨という場所でこんな人に会えるとは思っていなかった、というのが正直なところ。何か不思議なつながり、目に見えない力、そんなものをいちいち説明しなくても分かる仲間たち。お互いが「ああ、出会えたなあ」と思える出会だった。

VI-2 実施状況

2001年12月7日 午後5時半開場、6時開演というスケジュールであったが、若干遅れて映画が始まったのは、6時半ごろ。山中さんのスピーチでは、ツアーでの私との話を含めて、上映にこめた思いを語ってくれた。観覧者数は200名ほど？

何を思い、何を受け止めたのか、それぞれの人の心の中はわからない。千佐子さんは、「あえて伝えてみたい」と思う友達を3人連れてきた。その友達は、それぞれ「何かが変わった」「言葉にならない」などの感想を残していった、という。

かくいう私は、3番を見るのはこれで6回目だったが、蒼太を連れており、最初の場面で星が出てくるなり「かせい！」と会場内に響く声で叫んだときから、即退場。もう一度トライと思い、途中で何回か入るが、同じく「雪こんこん」、「イヌわんわん」を連呼。あげくに、会場内を歩き始めて、もうこれでダメ。と今回はまったくその気分にはなれずに終わった。映画に出てくる翔馬くんが、ちょうど今の蒼太と同じくらいの年。翔馬くんはこの映画をどう見るのだろうか、それをいつか聞いてみたい。

VII 一連企画に関する報道

各メディアでとりあげられたものをまとめておく。

- ・山梨日日新聞 9月29日朝刊 「地球の声に耳傾けて一写真家・故星野道夫さん 関連イベント相次ぐ」
- ・産経新聞 9月29日朝刊 山梨版 「甲府に壮大なオーロラ」
- ・毎日新聞 10月8日朝刊 山梨版 「甲州日記一オーロラストーリー」
- ・産経新聞 10月23日朝刊 山梨版 「アラスカから次世代へのメッセージ」
- ・朝日新聞 11月3日朝刊 山梨版「科学館で星野道夫写真展」
- ・毎日新聞 11月26日朝刊 環境欄 「夢を追う オーロラの魅力全国に 高橋真理子さん」

・星ナビ 2002年1月号 潜入ルポ「生と死、科学と神話・・・深いテーマに賞賛の声『オーロラストーリー』」

・月刊ミュゼ 2001年12月号 「思いが結実したプラネタリウム番組『オーロラストーリー』が好評」

VIII 未来に向けて

これまでに記してきた企画について、いろんな方々が残してくださった感想を見ると、そこにすでにその数だけの物語があることに気づく。それぞれの人が、何かに出会った瞬間—それが人であれ、作品であれ、自然であれ—そこには物語が生まれているのだ。これまでは、星野道夫の言葉と写真によって彼の物語ばかりを見てきたが、彼に接することで生まれてきた多くの人々の物語、それをかいま見ることができた。そして、私自身の物語は・・・今、ようやく始まるような気がしている。

プラネタリウムは多くの課題を私に与えてくれる。ここを訪れる子ども達に一体何を見せていくのか、何を伝えるのか、子ども達はどんな宇宙観を持っているのか・・・多くの人にとって、天文学がなしえることは何か、星を観ることが何に繋がるのか・・・宇宙を中心として、自然、生命、存在、すべての分野につながる総合的な場所であり、大いなる可能性を持っているにもかかわらず、なぜ斜陽といわれてしまうのか・・・自分の社会的立場・・・このような社会教育施設の現状と問題、その克服・・・発散してしまいそうな課題の中に、それでもやはり、「いつかミュージアム」の夢にはきっと何かの形で繋がってゆくだろう。これまで、ここに書ききれない、多くの出会いがあった。その中のいくつかは、もしかしてほんとうにミュージアムができるんじゃないか、と思わせた。

星、ありとあらゆる生命、無機物、人間、人工物・・・宇宙におけるさまざまな存在を俯瞰し、自分をその中に位置づけていく・・・生きるとはこんな作業のことではないか。大袈裟な言い方ではあるが、普段から人は、日常の中で、その作業を繰り返している。地球のある場所において、ある人間関係において・・・その位置づけを、極狭い領域でおこなっている場合、少しひいて、少し広い場所からその領域をみると、そこから見えてくるものは多々ある。それと同時に「自分はどこまでか」と考える。自分を囲む車、家、家族、町、友達、国、世界・・・地球。少しひいて始めて見えてくる世界。それらをもし自分のように「感じる」ことができるのであれば、人の痛みも、そして地球の痛みもわかる

ではないか。「地球を外からみる視点」。それを感じるために必要なもの、それはきっと五感を超えた想像力。その想像力のために、科学も物語もきっとその力を発揮させることが可能なはずだ。

自分と世界のつながり、現代の科学だけではそれを語りきれない。ほんとうは科学はそれを目指しているはずなのに、けれども、多くの人々にとっては、自分からかけ離れた存在となっている。そこに何かの架け橋をしたい。そのためにきっと物語が必要なのだ。それを創作していくこと、そして各自の物語をつくるきっかけを与えること、それによってまた人と出会うこと、それを紡いでいくこと、こういうことがいつしか、プラネタリウム、その先のミュージアムでできるだろうか。

「はじめに」に書いたように、今回の仕事は私の人生に一つの区切りを与えてくれた。その仕事の中で学んだもの、出会った人々が、次なるものの輪郭を少しばかり浮かび上がらせてくれる。この機会に携わってくださった人々すべて、そして新たに出会うことにできた人たちに深く感謝したい。企画に多大なる理解と協力をしてくださった星野直子さん、オーロラストーリー演出の宮部勝之さん、オーロラクラブの新開さん、伊藤さん、写真展デザインの三村淳さん、「地球の自転軸を星野道夫に傾ける」BBS主催の鳥海なおみさん、どうもありがとう。そして私が仕事を続けていくことを可能にさせてくれている仙台の夫、仕事の時間は与えてくれないけど、パワーをくれる息子蒼太にも。そして何より、この10数年間の私の人生の軸を支えてきた星野道夫さんに心から感謝したい。

2001年12月 冬枯れの山を前にして

高橋真理子